

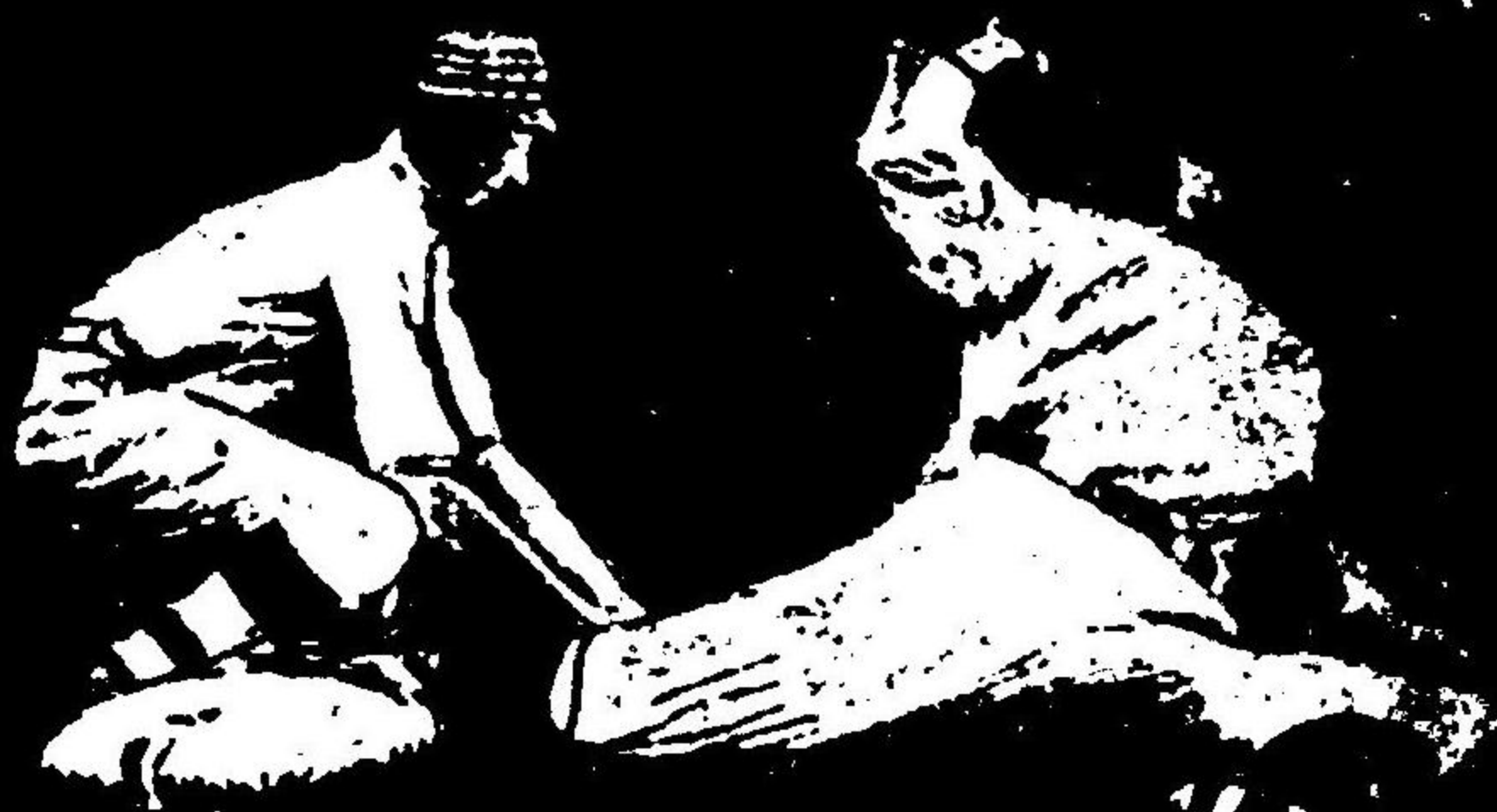
332

193

田大寺蓮寺

伊勢田剛編

# 野球



332-193



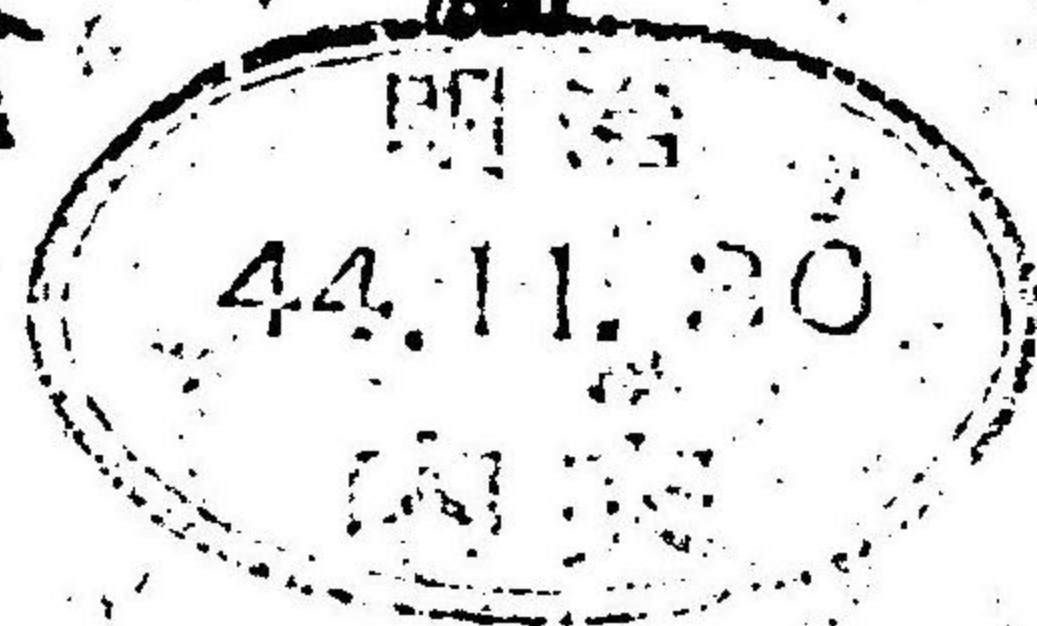
野

球

伊勢田

剛

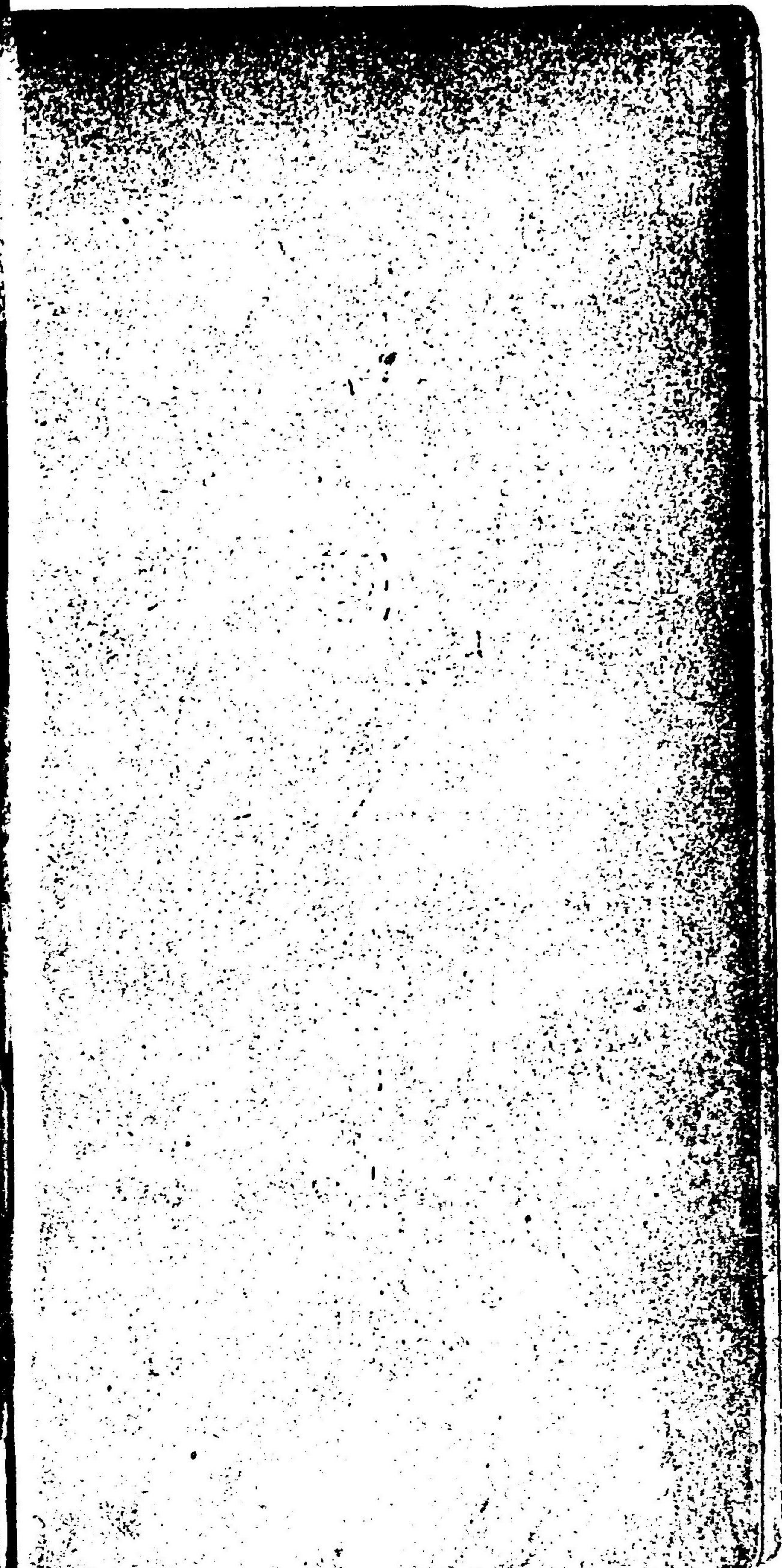
編



44.11.20



球界の天才メイカップのバットとスライド



早 稻 田 大 學 選 手



浅沼君 四原君 深堀君  
 萩野君 山本君 高木君 八幡君

(右より)  
 大井君 原君 三神君 大村君  
 山口君 増田君 福長君 小山君

早 大 の 猛 打 捕 び

同 捕 手



磯長君 山口君



三神君 八幡君 大井君 増田君 深堀君

新 傳 四 投 手



大村君 小山君 山本君 萩野君

老練なる大木君のおま



伊勢田の  
バットと  
捕手の  
サイン



早大の  
小カツア  
小山君の  
投手と  
打撃  
ぶり

慶應普通部選手



麻布中学校選手



愛知一中選手



手選校學中山稻早



手選院學山青



手選校學城成



士戰州の田三門稻



三 吉川君、笑輪君、小山君、四川君、藤田君、  
田 高濱君、尾崎君、佐々君、藤山君、神宮君、

門 稻 伊勢田、小川君、飛田君、伊藤君、鈴木君、  
子内君、河野君、押川君、泉谷君、中央三島君、

(右より)

稲門三田のドンタスの群集



三島君の  
奔り振り



三田の三勇士

怪腕投手菅瀬君



石川君のテボシゲン



神吉君 小山君 福田君

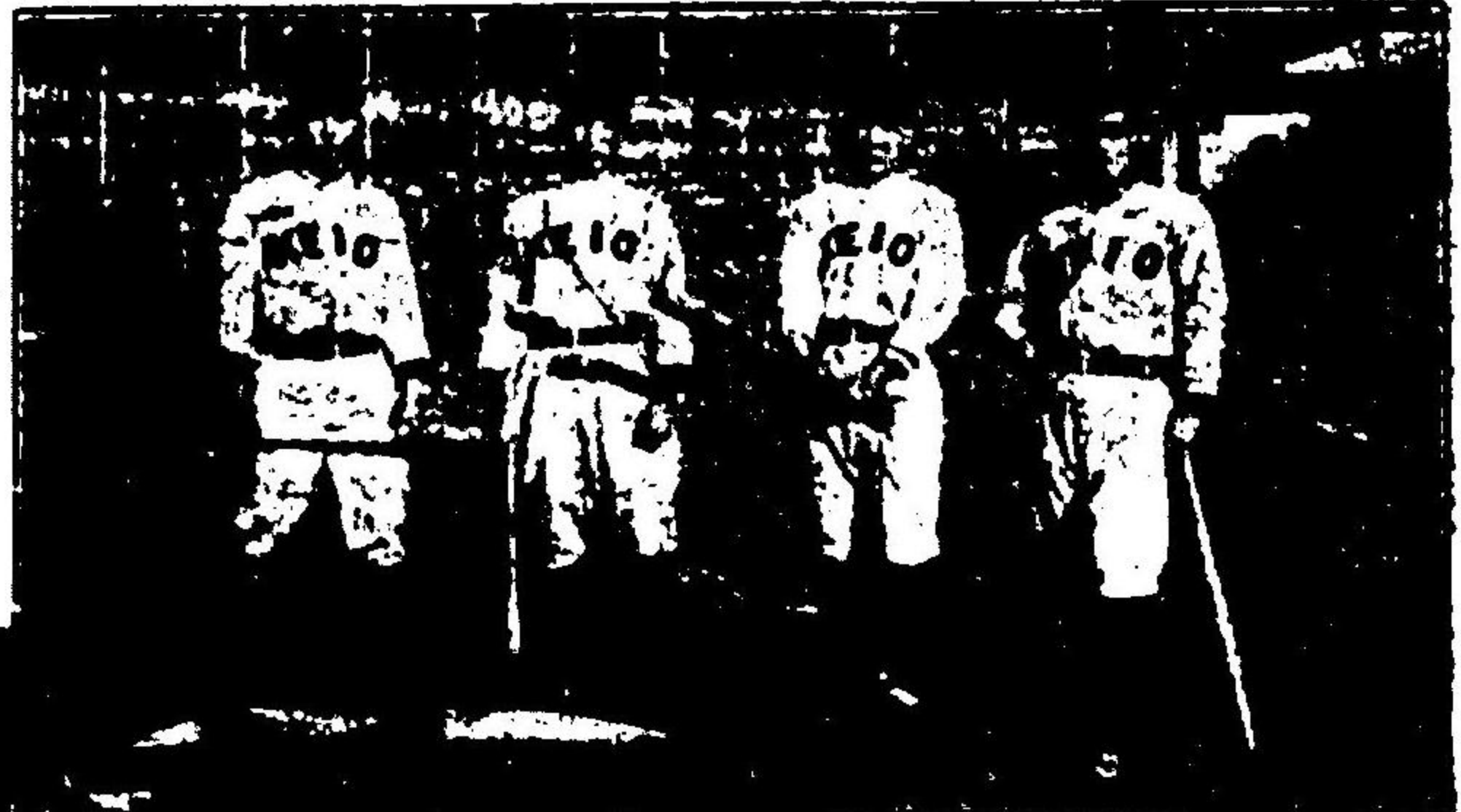


同捕手



三宅君  
肥後君  
富樫君

慶軍の強打手



同内野手

肥後君  
高濱君  
奈良崎君  
懸山君



日下君 原本君 阿部君 後藤君 尾崎君 森君

ボストンの強打者ラミール氏のラスディオ



ニロウのクレープアブテンドル氏の監造

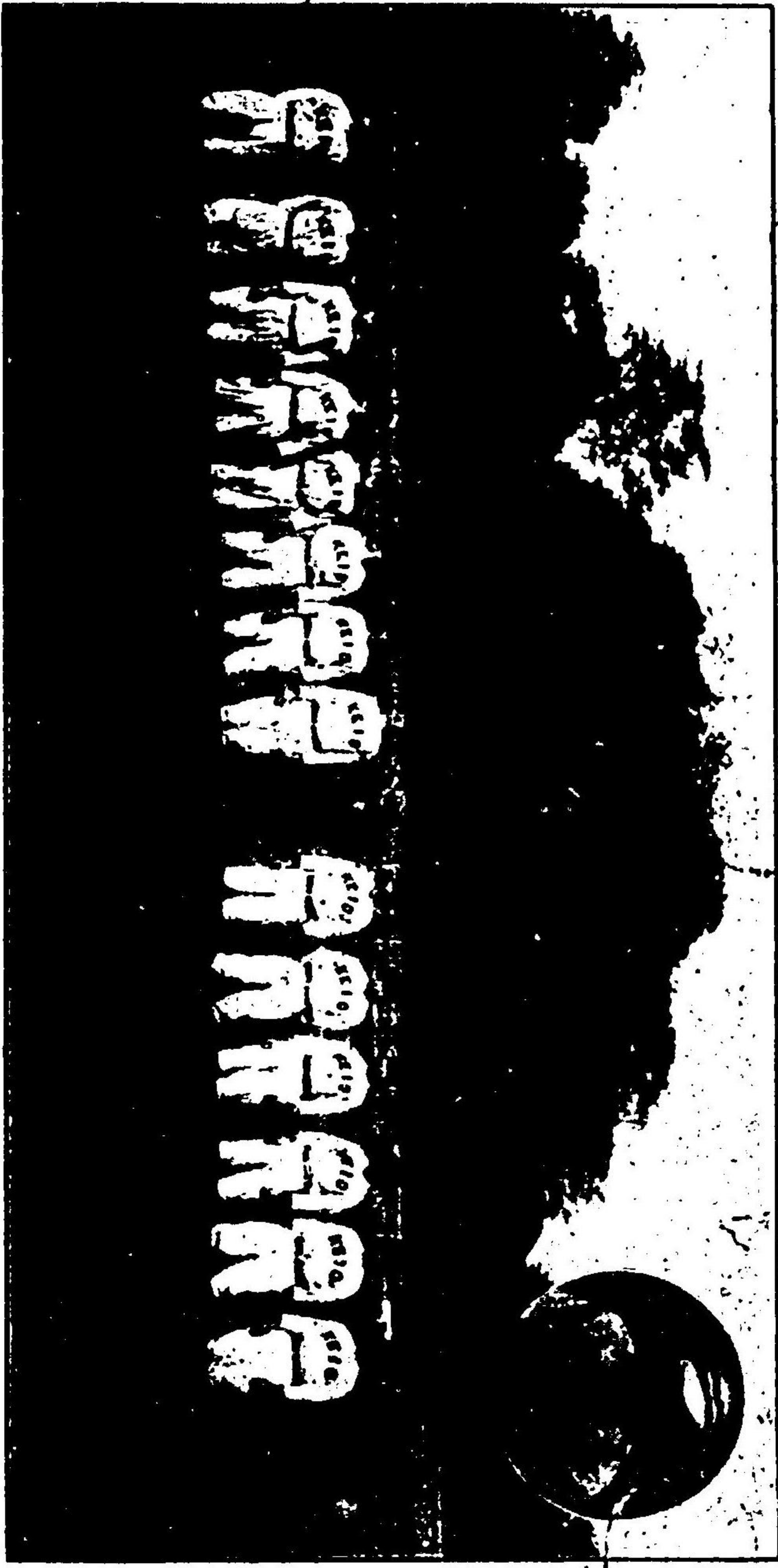
稲門の獅子内君



稀右の野外手三神君







菅原君、宮原君、三宅君、石川君、  
藤野君、山下君、奈良崎君、高橋君、

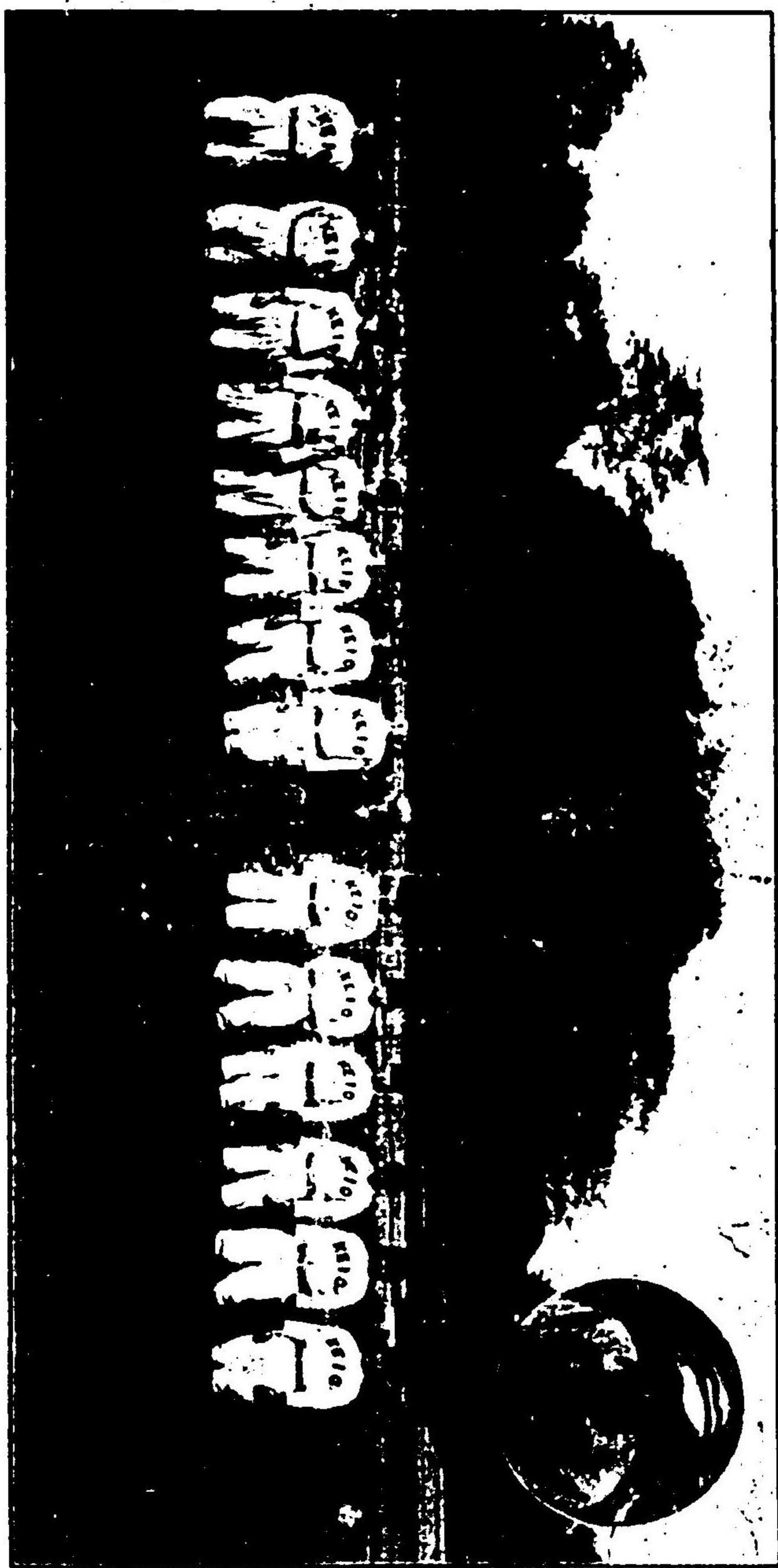
肥後君、藤山君、星木君、阿部君、  
尾崎君、後藤君、マホウ、一、箕輪君、

(右より)

(左より)

## 例 言

本書の目的とするところは、必ずしも之を以て斯道に造詣深  
き諸君の参考に供せんが爲めではない。むしろ之によつて斯道  
に興味を持たるゝ初心者諸君の手引ともなり得たいと云ふ希望  
によつて成つたのである。従つて成るべく平易にして概括的な  
る説明を試み、主として吾等の先輩諸君の意見若くは教訓を基  
礎とし、好んで著者の私見を加へたり、若くは特殊的研究の煩  
に陥つたりするるとも避けたのであるから、此の點に關しては  
與ふも讀者諸君及び先輩諸君の寛恕と諒察とを願ふ次第である



菅原君、富樫君、三宅君、石川君、  
藤君、山下君、奈良崎君、高橋君、

肥後君、野山君、藤本君、阿部君、  
尾崎君、後藤君、平野君、一井君、

(右より)

(1)

# 例言

本書の目的とするところは、必ずしも之を以て斯道に造詣深き諸君の参考に供せんが爲めではない。むしろ之によつて斯道に興味を持たるゝ初心者諸君の手引ともなり得たいと云ふ希望によつて成つたのである。従つて成るべく平易にして概括的な説明を試み、主として吾等の先輩諸君の意見若くは教訓を基礎とし、好んで著者の私見を加へたり、若くは特殊的研究の煩に陥つたりすることを避けたのであるから、此の點に關しては尤も讀者諸君及び先輩諸君の寛恕と諒察とを願ふ次第である

著は種々なる事情からして、出版を急がねばならぬ必要に迫られた爲り或は意外の脱漏若くは過誤に陥つた點もあるかも知れないが、それは他日再版の機を待つて訂正することとする。

明治四十四年十一月

著 者 識

# 野 球 目 次

## 第 壹 編 總 說

第 壹 章 運 動 として の 野 球 ..... 一

第 貳 章 運 動 と 品 性 ..... 一三

第 參 章 野 球 選 手 たる 資 格 ..... 二二

## 第 貳 篇 攻 擊

第 壹 章 總 說 ..... 三五

第 貳 章 バ ッ チ ン グ ..... 三七

第三章 「バント」と犠牲球

四九

- (一)「バント」は如何なる場合に應用すべきか……………四九
- (二)「バント」となる時の構方……………五二
- (三)「バント」の打方……………五三
- (四)「バント」に関する注意……………五四
- (五)犠牲球……………五六

第四章 「フリー、バッティング」

五八

- (一)「打撃の練習の最初」……………五八
- (二)「打撃の秘訣」……………五九
- (三)「打撃の練習が第一」……………五九
- (四)「バント」の練習……………六三
- (五)「ゲーム」全体の打撃力……………六三

第五章 走 塁

六四

- (一)「走塁について」……………六四
- (二)「走塁に必要な事項」……………六六
- (三)「各塁間は如何に走塁するか」……………七六
- (四)「ステール、ホーマー」……………八四
- (五)「走塁に関する注意」……………八五
- (六)「コーチャー」……………九一

第參篇 守 備

第壹章 總 說 ..... 九五

第貳章 投 手 ..... 九八

(一) 投手の資格 ..... 九八

(二) 練習法 ..... 一〇〇

(三) 肩の衛生 ..... 一〇三

(四) 内野手としての投手 ..... 一〇四

(五) 投球上の注意 ..... 一〇五

(六) 「カーブ」 ..... 一一〇

(七) 投手としての心得 ..... 一一四

第參章 捕 手 ..... 一一五

(一) 捕手たる資格 ..... 一一五

(二) 投手との連絡 ..... 一一六

(三) 捕球に對する注意 ..... 一一八

(四) 投球に關する注意 ..... 一二三

(五) 捕手の心得 ..... 一二三

(六) 練習法 ..... 一二五

第四章 壹壘手 ..... 一二六

(一) 壹壘手の資格 ..... 一二六

(二) 壹壘手の位置 ..... 一二七

(三) 捕球の注意 ..... 一二七

(四) 他の野手との連絡 ..... 一二九

(五) 打者に對する注意 ..... 一三三

第五章 二塁手……………一三四

(一)二塁手の位置……………一三四

(二)投手及び捕手との連絡……………一三五

(三)他の野手との連絡……………一三七

第六章 三塁手……………一三八

(一)三塁手の位置……………一三九

(二)三塁手に収まらしき条件……………一三九

(三)三塁手に對する注意……………一四〇

第七章 遊撃手……………一四二

(一)遊撃手の位置……………一四二

(二)遊撃手に對する注意……………一四二

(三)他の遊撃手との連絡……………一四三

第八章 外野手……………一四五

(一)一般の注意……………一四六

(二)各外野手に對する注意……………一五一

第九章 守備上の注意……………一五三

(一)攻撃……………一五三

(二)「バント」に對する備方……………一五四

(三)球をつける時の注意……………一五五

(四)失策について……………一五五

(五)投手に對する授助……………一五七

(六)常に心得居るべきこと……………一五七

(七)平凡なる球に對する注意……………一五八

附 録

(八) 誰にでも捕らるゝ球……………一五八

(九) チーム・ワーク……………一五九

第十章 練習法……………一六三

(一) 投方と捕方……………一六三

(二) 「チーム」としての練習……………一六五

(三) 仕合開始前の練習……………一六六

第十一章 審判について……………一六七

第一 記録法……………一七

第二 野球規則(四十四年度)……………一六二

野 球

伊 勢 田 剛 編

第壹編 總 說

第壹章 運動としての野球

教育の上から云つて、體育が他の精神的方面の教育と並行すべきものであることは、合更戦等の敗れを要せずして明かなことである。所謂健全なる精神は健全なる體軀に宿ると云ふ言葉は、よしや全般の眞理を含んで居ないまでも、秀才と呼ばれ英才と稱へらるゝ幾多の青年が、或は滿腔の壯志を抱いたまゝ半

途にして斃れ、或は可惜有爲の材も身體の脆弱に制せられて伸ばすに由なき幾多の實例は、如何に體育の重すべきものであるかを、生きたる雄辯もて絶へず吾等の前に語りつゝあるてはないか。まして信頼すべき専門學者の統計によれば、日本人の平均死亡年齢は三十七歳にして、死亡者の半数以上が三十歳未満の青年であると云はるゝをやである。唯神か唯物か、さては靈肉一致か並行かそれ等のことくしい論議は暫く措き、假に肉體を以て精神を盛る器なりとするも、其重んずべき理由は毫末も減じないのである。若し修養の途にある者にして、此精神を盛るべき器物の訓練と發育とを度外視するやなうことがあつたならば、其人は冷も底なき桶を以て水を酌むものと同一の運命を歩みつゝあるものである。器物は之に盛らるべき内容以上に貴重ではないかも知れぬが、而

も少くとも其と同等に貴重であると云ふことができる。

既に吾等修養の途にある者にとつて體育が忽にすべからざるものであるとすれば、次に來るべき問題は、我等は如何にして體育に動むべきかと云ふことである。云ふまでもなく現時の學校教育に於て課せられつゝある多くの運動、たとへば兵式體操や擊劍や柔道の如きは、此の問題に答へんとして置かれた處のもので、大體に於て或程度まで、若くは時として満足すべき程度まで其効果を收めつゝあるのである。而して其の効果が獨り肉體的方面のみに止まらず、牽いて精神的方面にまで及ばんことは、其の局に當れる人々の等しく努力し希待するところであるが、多少こそあれ事實上にも其功果の擧げられつゝあるのは何よりも慶賀すべき現象と云はねばならぬ。



しかし乍ら運動は之に精神的興味を伴ふ場合に於て其の効果がことに著しく顯れるのは、多少とも斯る方面に意ある者の等しく認むる所である。否若理想<sup>てき</sup>的の運動を求めたならば、それは常に精神的興味を伴つて居なければならぬのである。精神的興味を缺ぐところの單なる器械的運動は、花ならば香りのない花、水ならば味の無い水に等しいと云はねばならぬ。學校に於て課せられつゝある兵式體操の如き、忠實なる科學上の研究と汎汎なる實際上の經驗とに則つて作り出されたるものであるにも係らず、あるが如き僅少の時間を以つてしては、到底肉體上に何等著しき効果を與ふる能はざるは勿論、所謂困苦缺乏に耐ふるの精神的修養に至つては、殆んど何等積極的の交渉だも認むる能はざるが如き状態にあるてはないか。斯く云へばとて我等は決して學校に於ける體操科

を絶対に有害無益を斷ずるものではない。只あるが如き僅少の時間と興味<sup>きょうみ</sup>の缺<sup>けつ</sup>乏<sup>ぼう</sup>とを以てしては、到底満足すべき効果を擧ぐることは出来ない<sup>出来ない</sup>と主張するものである。従つて眞面目に體育に意を須<sup>もと</sup>むんとする者は、是非とも此外に何等か適當の運動を求めて、其の缺を補はなければならぬ。而して此また現在既に實行されつゝある事實なのである。彼の擊劍や、柔道や、蹴球や、庭球の如き皆這個の要求に應ずるもので、吾が野球の如きも亦た其一たるを失はないのである。

吾等は運動に興味を伴ふことの必要なるを説いた。さらば所謂興味なるものは、如何なる種類の運動にして之を伴ひ得るであらうか。此の問題は極めて複雑なる要素を含んで居て、必ずしも輕々にそれと斷じ去ることは出来ない。而して一面よりすれば興味なるもの、大半は主觀的方面に存するので、之を離れ

て単に運動其もの、客観的價值を定むることは、極めて困難なる事業であると共に、實際上然まで意味なき事業であるかも知れない。て、今は暫く其等のくだくしき分類を避けて、只大體の上より見る時は、興味は其運動のうちに含まれたる遊戯的性質即ち享樂的性質の多少に比例することを見出すのである。而して享樂的性質の殆んど全體を覆ふものは競技的性質に外ならないのである。試みに廣く一般に行はれつゝある遊戯若くは運動が、殆んど全く「競技」なる名詞の下に包含され得べき事實に注意したならば、恐らく何人と雖も吾等の説に同ずることを躊躇しないであらう。然り、運動の興味は或る場合に於て競技の興味と殆んど一致すると云ひ得らるるのである。

然らば吾等は果して單に興味と云ふことのみを中心として適當なる運動を求

む可きであらうか。而して競技的性質のみに満されたる運動を得て満足なる結果を見る事が出来るであらうか。否、否、單に興味の充溢競技的性質の豊富のみを唯一の標準として撰ぶ時は、他の之と同等若くは夫以上に必要なる要素を逸して了ひ一種の不具なる運動を撰び、彼の器械的運動に於てすら見ると得ざる流弊に墮し去るのである。若し競技的性質をのみ標準として撰ぶならば、多くの遊戯、ことに室内遊戯の中には絶好無二のものが見出さるゝに相違ない。併し吾等は競技的性質に於て優たるが故に、歌カルタや、トランプや圍碁等を青年諸君の運動としては元より、消閑の具としてすら推奨するに躊躇するものである。青年に傳へべきものは其の意氣である。潑刺たる元氣と剛堅なる氣象とである。従つて其の撰ぶべき運動も亦出來得る丈活潑にして元氣に富めるものでな

ければならぬ。若し單に競技的性質と云ふことをのみを中心として考ふるならば、恐らく技術の巧緻を要する運動程優て居るかも知れない。併し巧緻は兎もすれば繊巧に陥り、繊巧は墮弱を伴ひ、墮弱はやがて元氣の消耗を來すの傾きがある。思ふに青年ことに現代の青年にとつて此以上に恐るべき危険はないであらう。吾等は此の意味に於て、激瀾たる元氣と剛堅なる氣象とを養成し得ると云ふことの時には、多少競技的性質を没却することを甘じなければならぬ。況んや物質的文明の流弊漸く深さを加へ、青年意氣の頹敗屢々識者の憂慮を買ひつゝある今日に於て、活潑なる運動の鼓吹は之が救済策の最も當を得たるものゝ一なるをやである。吾等は此の意味に於て、よしや野球が技術の巧緻と云ふ點に於て、他の或種の運動に一步を譲ることありとも、切に之を世上幾多の

青年諸君に推奨し度いと思ふ者である。野球を包む空氣は活潑である。野球を彩る色彩は爽快である。鐵棍鳴り熱球沙を嚙むところ何人と雖ども一點女兒の氣を認むることは出来ないであらう。野球の生命は男らしさの外に求めることは出来ない。吾等は今茲に野球と他の運動とを比較論評すべき餘裕を有しないが、而かも此點に於て野球が他の孰れの運動に比するも何等の遜色をも有せざることを斷言するに憚らざる者である。

併しながら元氣と云ひ活潑と云ふ、働もすれば過激に流れ粗暴に陥る傾向を持つて居るのは避く可らざる自然の勢である。而して多くの運動なるものが兎もすれば過激粗暴に墮して他方面の修養に累をなすはもとより、時として肉體上にすらも恐るべき結果を齎し來るが如き傾向あるも亦否むべからざる事實であ

る而かも運動によつて得らるべき精神上肉體上の好影響を有功なる程度に於いて得んが爲には、少くとも或程度以上に活潑なる運動を撰ばねばならぬ。多少とも兒女の氣を帯びたる運動を以てしては到底満足すべき結果に到達することは望まれないのである。我等は野球が有する多くの特色と長所とと數ふる場合に、此點に於いて野球が優秀なる地歩を占むることを主張するのは必ずしも過當であるまいと信ずる。

多少とも興味を伴ふ運動を撰んだ場合に於いて、其の運動は多くの場合競技的性質を舍むのは自然の數であると共に、其運動は單獨的であると云ふことかから免れることが出来る。即ち如何に少數なる場合に於いても競技の相手たるべきものを一人丈は有しなればならぬのである。併乍ら大部分の運動が多少と

も競技的性質を帯びて居るにも係らず、同時に多數の者が参加し得るものに至つては寥寥として指を屈するに過ぎないのである。競技参加者の多數であると云ふことは即ち他の半面に於て運動の興味を複雑ならしめ深厚ならしむる所以である。而も等しく多數の人々が参加すると云ふ場合にも、其等の人々が個々別々に参加して各々單獨の活動を試みるものと、各々聯繫して協力的活動を試みるものと、自から二箇の區別を生ずるのであるが、若此の兩者の比較を試みる者ありとせば、何人と雖も直ちに前者よりも後者が競技上の趣味に於て更に一層豊富であることを認むるであらう。單獨的と云ふことは、一面より云へば單獨と云ふことである。協力は即ち複雑であり、複雑は即ち巧緻であり巧緻は即ち興味之深さと強さを増す所以である。加ふるに協力的運動は組を同

じうせる競技者間に協同一致の性神を缺如する時は、到底満足すべき結果を得る事は出来ない。従て之に没頭せる人々は、運動其もの、性質上よりして知らず識らずの裡に協同一致の性神を養はしめらるゝのである。他の單獨的なる運動が、運動として如何に巧緻であり如何に趣味深くとも、斯の如き重大なる精神的好影響を運動家に與ふることは、殆んど絶對的に不可能と云つて可いのである。試みに此の點によりして野球の運動的價値を評價せんか、他の如何なる運動を以て之に比較するも、野球の壘を摩し得るものは殆んど皆無と云ふも不可なしてある。

之を要するに青年の修養は單に智徳の方面にのみ偏することなく、體育の方面も亦同時に充實を計らるべきものである。而して之に適當なる運動を求むる

場合に當つて、其の興味の豊富なる點に於て活氣ある點に於て、粗暴過激に陥らざる點に於て、協同的活動を必要とする點に於て、我等は野球を以て眞に絶好無二の運動として、滿天下の青年諸君に推奨せんとするものである。

## 第二章 運動と品性

單なる器械的運動は其の與ふる功果に於て著しく薄弱であるが、併し多少とも精神的興味を伴ふものに至つては、其の功果が強大であると同時に、兎もすれば種々なる弊害を伴ふの恐れあるは、自然の數として如何とも致し難い處であらう。吾等は其の僅少ななる弊害のみを見て直ちに一切の運動若くは競技を絶對的に教育界より排除せんとする者ではない。一長一短は人事の常である。

吾等は只當に進んで其の長をとると共に一方其短を避くることを心懸て居さへすれば可いのである。況んや野球の如き我等青年の運動として絶好無二の條件を具ふるに於てをやである。

興味は屢々人をして其の樂みに淫せしむるの傾を持つて居る。棋家の圍碁に於けるが如き釣魚家の釣魚に於けるが如き、所謂浩蕩として歸るを忘るゝの境に陥る者あるは、其の極端なる實例にして、而も吾等の常に目睹耳聞するところのものである。而して此亦或る程度までは自然の數として避け難き傾向と云はねばならぬが、其興味中に多少とも競技的分子より來るものある場合に於ては、此の傾向は更に更に激烈となり、屢々單に興味の耽溺と云ふ以外に何等か他の色彩を帯びて來るのである、而して單なる興味に耽溺は多くの場合積極

的に品性上の悪影響を與ふることは稀であるが、多少とも競技的分子より來る興味を加ふる場合に於ては、其の影響は屢々吾等の品性の根本に觸れんとする傾きを持つて居るのである。

若し野球に弊害を伴ふ場合がありとするも、それが單なる興味上の耽溺に過ぎないならば、その與ふる損害は然まで恐るべきものではないであらうし、また其を矯正することも餘り難事ではないかも知れぬ。併し乍ら其の興味が競技的方面のそれを主とする場合に於ては、頗る寒心すべき影響を齎すと共に其の矯正は一日も忽にすべからざるものである。そは兎に角此等の弊害は其いつれを問はず、餘りに運動の興味に耽溺せる餘り、何時の間にか運動の目的を忘却せるより起り來つたものである。我等が世の青年諸君に運動を推奨せんとす

る所以のものは、そが我等の人格を内外兩面よりして最も完全に發育せしむるに缺如すべからざる方便と信ずるからである。而して人格の大部分を覆ふものは品性である。智育と云ひ、徳育と云ひ、體育と云ふ、要するに其の終極するところは吾等が品性の完全なる發展に外ならない。智的修養に日夜忙殺されつゝある吾等青年は、須らく常に意を此の點に注ぐと共に、運動に就いても亦切に思を此點に致すべきである。

ことに現今の如く野球があらゆる運動中の花形を以つて目せらるゝのみならず競技の多くが對校的である場合に於いては、我等は常に如上の弊害から免かれるよう注意して居なければならぬ。運動中の花形とは野球が他の運動に比して一般の人氣を博しつゝあると云ふ意味で、單に學生界に於て然るのみならず

今や殆ど一般の階級を通じて、所謂野球通野球狂なる者を有するに至り、宛ら角力に對するが如き感じを以つて臨まるゝに至つた。人氣はやがて喝采を意味し賞讃を意味する。喝采と賞讃とは藝人若くは藝術家にとつては生命の泉とも云ふべきものであらうが、吾等修養の途にある青年にとつては殆んど一顧の價値だも有しないものである。若しバットを揮ひ球を弄ぶものにして一度斯る方面に其心を奪はれんか、彼は實に恐るべき悪魔の誘惑を蒙りつゝあるのである。上に述べたる運動の弊害は茲に至つて最早や寒心すべき極度まで達したと云はねばならぬ。

彼は既に迷へる小羊である。彼は個人としてあらゆる種類の悪影響を蒙るであらう。一切の男らしき眞面目さは元より、激刺たる青年の元氣、不撓不屈の意

志、吾等の品性に無限の光輝を放たしむべき其等の要素は、漸次に消磨腐蝕され、街氣と、女々しさと、虚飾と、傲慢と、毒舌とに囚へらるゝてあらう。更に一個のチームとして見る時は、腐敗墮落せる個々人の集りとして所謂商賈人根性藝人根性なるもの、囚ふるところとなり、只重んずるところを勝負にのみおき、マツチに勝たんが爲めには、何物をも犠牲として恥ぢざる厚顔無恥下劣醜惡なる氣風に満され、學生としての面目意氣は云ふまでもなく、一校の代表者たるべき品格は全然認むべからざるの憐れむべき状態に墮落するであらう。暫く眼を轉じて我野球界の過去を眺むれば、最近十年間に於ける進歩は實に目覚ましいものである、早稻田大學選手の渡米は、斯界にとつて恰も幕末に於ける新貨頭一發の砲聲にも類して居た。一度彼等によつて所謂米國社込の新智

識を輸入されたる我野球界は、爾後或は早慶の爭覇戦によつて、或は外國諸チームの來訪によつて、或は早慶選手の渡布及び渡米によつて、一方に於ては益々技術の精妙を極むると共に、他方に於ては益々野球趣味を社會一般に流布するに至つた。而して今や米國の國民的競技なる野球は、轉じて我が國の國民的競技たらんとするの勢を呈するに至つた。然り、我が野球界の進歩は之を他の如何なるものに比するも決して遜色なきものであつた。併しながら之を米本土に於ける野球が恰も我が角力の如き觀あるに比較するときは其の普及の程度に於て到底日を同うして語るべからざると共に、技術の點に於ても彼此の差は番に段違ひのみでないといふはねばならぬ。

そは兎に角日本の野球は、その發達史の示すが如く、主として學生の手によ



つて今日の隆運を見るに至つたのである。而してあるが如き今日の人氣も大部分は學生を其の對象とすると云はねばならぬ。ボールを弄びバットを揮ふ者の九分九厘までは學生である。我が國の野球界を代表するチームが永き間早慶兩校撰手の間にあつた一事を以てするも充分這般の消息を解することが出来る。従つて商買人チームを有すること恰も我が角力協會の如き米本土の状態とは全然趣を異にして居るのである。思ふに此の傾向は種々なる理由よりして、今後暫くの間は持續せらるゝことであらう。よしや今日の趨勢より見て、所謂商買人チームの出現が必ずしも空想に終らざるべき理由を認め得らるゝとも、而してそが一般球界の爲め如何に望まじきことであるとも、吾等修養の途に在る青年にとつては甚だしく意を勞するに價ひせざることである。

吾等はどこまでも青年でなければならぬ。修養の途にある青年でなければならぬ。運動としての本意を忘却せざる範圍内に於て、技倆の熟達を計らんが爲めには教を商買人に請ふも或は悪しくないてあらう。無論範を其處に求むるに何の不可のあるべき理由はない。しかし如何なる場合に於ても吾等が青年であること、而も修養の途にある青年であることを忘却してはならぬ。品格と名譽とを重んじ、徹頭徹尾學生的でなければならぬ。若し誤つて本末輕重を轉倒し、單に運動の爲の運動、若くは競技の爲の運動と云ふが如き有様とならば、其の弊害は實に寒心すべきものとなるであらう。上に述べた如く日本の運動界は未だ野球商買人を容るゝまでに、否必要とするまでには發達して居ないのであるから、單に生活と云ふことのみを眼中に置いて云ふも商買人的たることは無意

味である。況んや、有爲なる學生として之を修養の一助たらしめんとするやある。我等は出来る丈け注意して、此の弊害から免れることを心懸け、野球の興ふる利益をのみ享けるやう心しなければならぬ。

### 第三章 野球選手たる資格

運動として野球を弄ばんとする者にとつて、何よりも體性の修養の重んぜらるべき所以に就いては既に述べた通りであるが、若し茲に或る學校若くは或る團體に於て、代表的選手を撰ぶべき必要に迫られたとしたならば、多くのプレイヤー中より如何なる資格あり特長ある者を撰ぶべきかは、蓋し充分なる考慮に價する問題であらう。

之を大體より云ふ時は各人各種の長所を備へて居る筈であるから、各々其の長所に適したる地位職分を保たしむるのが撰び方の第一義であるに相違ないが、それは後に各々のシートに就いて説く場合に詳しく述べることにして、茲には只大體の上から野球選手として適當なる資格に就いて、概括的なる叙述を試みることにしよう。

先づ體格に就いて云へば、あらゆる種類の運動家に適當なる體格、即ち運動家としての理想的體格とも云ふべきは、四肢五體の圓滿完全に發育したものの、何處と云つて特別に發達し過した點もなく、さればと云つて之と云ふ未發達の箇所もないと云ふ極めて吊合の好く發育した體格で、しかも所謂短軀にして肥夫なよるも、瘦過ぎない程度に於いて相當の身長を有する者が最も適當だと云

はねばならぬ。

以上は身體の全體に就いて云つたのであるが、今少し細かな部分に入つて云へば、強い肩を持つて居ることが必要である。成程少々位弱い肩も熱心なる練習の結果幾分強さを増し、他の方面の長所によつて之を補ふことも出来るであらうが、併し先天的に強き肩を有し、之に熱心なる練習を加へたのが、無論發達の程度も高きに達するであらうし、また其の効果を擧ぐることも、比較的容易であると言はねばならぬ。つまり強き肩は一面に於て強く且つ正しき球を投げしむる根本要素であると共に、他面に於ては強く確かなる打激の一要素に外ならないのである。而して先天的に肩の弱き者若くは後天的の理由によつて肩を痛めたる者が、投球に就いて絶えず非常なる苦心と研究とを重ねつゝあるに

も係らず、到底其の弱點を充たし得ないのを見たならば、如何に強き肩の重ぜらるべきか、瞭解せらるゝであらう。従つて之を反對の方面より云ふ時は、強き肩を有せざる者は他に異常なる特色を有して此の缺陷を補うて餘りあるか、乃至は他に適當なる人物を求め得ざるか、それ等の場合の外撰手たるべき資格を缺如する者と云つて可いのである。

其次に来るべき要件は、視力に缺點なきことである。日本の野球チームは殆んど全く學生若くは學生出身の紳士連によつて組織せらるゝが故に、比較的近視眼の者が多いのも事實止むを得ないことであるが、併し若し理想的のことを云へば視力の完全であることは、最大なる條件の一であると言はねばならぬ。眼鏡を用ゐることは日常の生活に於てすらも可成不便であるに相違ないが、こ

とに比較的微妙なる動作若くは活潑なる行動の必要なる運動にあつては、其の不便は蓋し意想外であるに相違ない。殊に野球に於ては、捕球に於ても、打撃に於ても、また成程度まで投球に於ても、正しく早く視ると云ふことが、極めて必要であるから、眼鏡を用ゐることの不都合は今更茲に云ふまでもないことである。曾つてリーチ全米野球團の渡來せる時、彼等の成者は日本の野球團に眼鏡を懸けたる者の多きに一驚を喫したとさへ傳へられて居るではないか。將たまた飛球若くは擊球を捕らんとする場合に、眼鏡を懸たる者が、屢々平凡なる失策をなし、若くは打者として確實を缺ぐ者の多きを思はゞ視力の完全が野球選手たる上に如何に重大なる條件であるかを窺知することが出来るであらう。

次は疾走力を有することである。野球に於て走塁の如何に重要であるかは後に述ぶるが如くであるが、我邦の現在の如く、野球の行はるゝ範圍が比較的狭少なる部分に限られ、従つて選手なる者も或る特殊の階級に限られたる場合に於ては、圓滿なるプレーヤーを得ることが困難であり、幸いては選擇の條件も餘り細かなる點までは及ぼす事が出来ない有様に在る爲か、疾走力の如き前に挙げたる視力と共に比較的等閑に附せられつゝあるが如き観がある。勿論走塁法の巧妙は必ずしも疾走力の優れたるのみによつてのみ得らるべきものではなく、むしろ其他の點と相依り相待つて後始めて完全の域に達するのであるが、併し乍ら疾走力が其の最大要素の一であることは争ふ可らざる事實であると云はねばならぬ。

最後に最も重要な条件は先天的に優秀なる打撃力を有することである。日本現在の諸チームの打撃力が如何に憐れむべき状態にあるかは、少しく米國野球界の状況に通ずるものゝ、必らずや一致するに躊躇しないところであらう。實に此の欠陥は從來來朝せる米國野球團によつても指摘批評せられた處でありまた親しく米國本土の野球界を目睹せる者の等しく痛嘆して措かざることろである。若し其のよつて來れる原因を研究する時は、或人の主張する如く優秀なる投手の無きこと、即ち先天的に體力體格の劣ることに在るかも知れないが、それは兎に角として、我が野球界の最も大なる欠陥が打撃の不振に存するは、蓋し否む可らざる事實と云はねばならぬ。更に他面より見る時は、先天的に打撃の拙劣なる者が練習と經驗によつて、優秀なる打撃力を獲得することは、他

の捕球投球等に比して極めて難事であると云ふ傾向が見ゆるのである。つまり打撃の拙劣は殆んど之を改善し得る方法がないと云つても可い位で、如何にバットの振方脚の構方等を矯正するとも一種奥妙なる呼吸に至つては殆んど神秘とも云ふべく、教示することはもとより經驗によつて自得することすらも極めて困難である。従つて日本人によつて組織せらるる野球チームの撰手たらん者の資格として、打撃力の先天的に優秀なるべきことを、最大条件の一として數ふることは、極めて適切必要だと云はねばなるまい。

更に轉じて精神的方面の條件に就いて述べんか、其の最も重大なるものは、飽くまでも大膽であると云ふことである。如何なる悲境に立つとも決して失望落膽せず、周章狼狽せざる大度胸を有すると云ふことである。絶えず積極的

元氣を失はず、常に悠々として敵手を呑むの概を保ち得る豪傑的態度を有することである。之を反對の方面より云へば、アガつたりヤケたりする傾向のなき、従つて餘りに神経的でなく消極的でなき性格を有すると云ふことである。たとへば如何なる競技によらず、平素練習の際は目の覚むる許り水際立つたる腕前を見せるにも係らず、いざ實戦と云ふ場合に臨めば、全然萎縮して日頃の手並の半分だも願はずことの出来ない者即ち勝負弱い者があると共に、平素は左迄にもないのに、いざ實戦となれば、或は悠々自若、或は奮激突戦、實力以上と思はるゝまでに技倆を發揮する者、即ち所謂勝負強い者とがあるのである。此場合に於て前者は撰手として撰ばるべく極めて大なる欠陥を有するので、勿論永き間の経験によつて所謂老巧の古強者となるに従つて、實戦の駆引も分り

呼吸も呑込め、漸次度胸も極つて来るに相違ないが、而しそれは到底容易なことでは到達し得られないので、所謂「三つ見の魂」はいつまで経つても失せず、地金は不用意の際に顯れるのである。従つて實戦の戦士として撰ばるべき者は寧ろ圓迂々々しいと云はるゝ位な方が、積極的の強味を持つて居るのである。次に重ぜらるべきは敏捷と云ふことである。茲に敏捷と云つたのは純粹の精神的方面から云へば、頭腦の働きの鋭くして競技中に生じ来る一切の出来事に對して、殆んど直覺的に突壁の間に正しき判断を下し得る能力と云ふのである。たとへば如何に微細なることをも看落さずして、直ちに之によつて敵の弱點を看破し、合圖や計略や、乃至動作を看破して、直ちに之に乗じ之に應ずるの策に出づることを云ふのである。之と同時に一面に於ては肉體的方面と聯關

して、一切の動作の機敏にして毛筋程の間隙にも直ちに乘じて活動し得る能力を云ふので、たとへば捕球投球のモーションはもとより走塁のスタート等の、或は疾風迅雷の如く、或は風に舞ふ胡蝶の如く、輕快敏速、眞に人をして端睨に苦しましむる底の先天的特質を要求するのである。但し此の特色は屢々最初舉げたる大膽と云ふ特色を犠牲とする場合が少くないから、其の邊は吳々も注意すべきである。若し大膽と云ふことを缺如するならば、此の種の特色は實戦に當つて、むしろ惡しき結果をこそ生め、決して好き結果を與へることはないのである。それに此の敏捷と云ふことは練習によつて或る程度までは發達せしむることが必ずしも不可能でないし、又時とすると技倆の未熟よりして一見魯鈍遲滯なるが如くに見ゆる場合も少くないのであるから、此等の點に關しても

充分なる注意を怠つてはならないのである。又其と反對に動作の遲滯若くは體格の肥大短小等の理由よりして、屢々外見上頗る大膽なるが如き態度を示すことが少くないから、此また同時に意を用ひなければならぬ。

前に體格に就いて述べた時、運動家としての理想的體格は短少肥大よりもむしろ瘦せ過ぎる程度に於てすらりとしたる體格を撰ぶべきことを主張して置いたが、併し是は只外部の形に就いて云つたのみで、たとへ比較的身長も低くまた比較的肥大若くは小造りなる體格を有する者なりとも、必ずしも動作が遲滯であり、體格が虛弱であるとは云へないし、事實又他の諸點に於て極めて優秀なる長所を有する者が、必ずしも稀ではないのであるから、徒らに外形の優秀のみに泥んで、折角立派なる撰手的資格を有する人物をして、充分其技倆を發揮

せしむる機会を得しめないやうなことがあつてはならぬ。

## 第二篇 攻撃

### 第一章 總説

野球といはず、總ての「ゲーム」に於ける勝利は、退いて守るといふよりは進んで敵を攻むるにある。守備は堅固に、危機一髪の間には難球を擡んで敵を憤死せしむるが如きは、勝利を得る上の一大要素には相違ないが、而しそれ等は消極的であつて、寧ろ鐵槌一揮、火の出る如き猛球を飛し、更らに最も見事なる盗塁を試みて、最後の勝利者となるのが、仕合の終極目的であるのはいふまでもない。従つて一切の攻撃に關する研究は、最も重要視せられ、吾等が先輩も亦この點に關して非常なる苦心と研究とを重ねてゐるのである。而して勝利



の最大要素たる攻撃に於て成功すべき要素は、主として大膽なる行動と、熟練せる技術との二者にあるといはねばならぬが、併し假令技術の熟練に於ては、如何に妙域に達したからと云つても、若し小膽であつたならば決して強打手としてボックスに立つ事は出来ないのである。而して偶々好打して走者となり得るも、徒らに敵を恐れ、大膽不敵の行動によつて大膽を奪ふことは出来ず、却つて敵に乗ぜられ、壘上に徒死して了ふより外はない。従つて精銳なる攻撃力を得る根本要素は大膽と云ふことであり、而して之と相待て寸時も忽諸に付すことの出來ないものが練習なのである。此故に我等は從來我が野球界の風潮として、専ら守備の精妙を誇とする傾向があるのに對して、今後は主として攻撃力の精銳を期すべきことを忠告せんとするのである。

第貳章 バツチング

(一) 打手として「ボックス」に立つ時の注意

打手として「ボックス」に立つ前に、是非心得て置かねばならぬのは、死者の數が幾人目であるかといふこと、走者は今壘に居るか、或は貳壘、三壘に居るかを考へ、自らは打手として、犠牲球を打つか、乃至は「ヒット、エンド、ラン」か、乃至は敵の守備上に於ける缺陷が何邊にあるかを看破して、必ず其處を衝き破らうといふ充分な覺悟をして、初めて「ボックス」に進まねばならぬ。自分の取るべき處置の如何をも考へず、如何なる球を打たうといふ用意もなくして、呆然「ボックス」に進んでならぬ。又「ボックス」に入る時

には、投手は如何なる動作にあるかをよく注意しつゝ入るやうにせぬと、投手は打者が「ボックス」に入りさへすれば、直ぐに球を投げて可いのであるから、打者が「ボックス」に入ると直様、投手は打者の不注意に乗じて「ストライク」を取ることがある。而していよく「ボックス」内に入つて、バットを構へたならば、此の時こそ投手から投げる球が、「カーブ」か「ストレート」か、乃至は高低遠近、球の性質をよく見定めて、必ず打つといふ堅い自信を持つて打たねばならぬ。

## (二) 打撃の姿勢

打撃の姿勢には、球を待つ時の姿勢と、將に打たんとする時の姿勢がある。

球の來るのを待つ時の姿勢は、始から餘り踏張らずに兩脚を揃へて立ち、上體

を幾分前方に屈み加減にして構へる方がよい。と云ふのは兩脚を踏張つて居ると、身體の自由がさかぬ爲めに、「カーブ」などの來た時には、勢ひ身體を自在に動かして打つことが出來ぬ。それから打つ時の姿勢は如何といふと、投手が球を投げる「モーション」をつけたならば、之れと同時に、右打手——左打手は右打手と反對は左の脚を投手の方へ踏張り、「バット」を充分後に引き出来る丈け手を伸ばして打つのである。必ず手を縮めたまゝ胸の邊で少さく打つてはならないし、身體を後方へそらさぬ様に打つのである。要するに打手としては身體を眞直に保つて打つといふ事を忘れてはならぬ。この條件に反する時は決して充分な力が入らないばかりでなく、「カーブ」の如きは徹頭徹尾打つことは出來ぬ。茲に充分な力といつたのは、力一配といふ意味ではない。何れ

かといへば餘り力を入れ過ぎると、少しも餘裕がないために、咄嗟の場合に當つて「カーヴ」などを打つことも出来ぬし、球の見當も見極め難い。従つて當る事が少くなる。で、「バット」に力を入れるのは先づ八分目位を適當とする。それから球を待つて居るうちは、なる可くたけ身體が自由自在になる様にして居るのがよいのであるが、將に打たんとする其の刹那には、全身の重さを、殆ど脚一本に集中するやうにして打たねばならぬ。而して「バット」は何れの時に於ても地面と並行に振るやうに心掛け、萬一低い球が來たと見たなら、腰を屈めて打つ様にして、必ず「バット」の端だけを下げてはならぬ。

(三) 「バット」の撰方と握方及び保存

A 「バット」の撰方

「バット」の長短輕重は個人の好き不好によることで、斯のく如き「バット」を撰べといふことは一概にはいはれぬ。唯其の選ぶにあつて自分の力に相應した「バット」、即ち自分の力で充分に振りまはすことの出來得るのを撰ぶ方がよい。而して又握りの細いのを好むものと、比較的太い握りを好くものがあるが、是とても各自好む處に従て差問はない。要するに「バット」を撰む要件は、自己の腕力を省みずに餘り重い「バット」を執らないで、自由自在に取扱はるゝものを選ばねばならぬ。

B 「バット」の握方

「バット」の握り方も其の好みに従つて長く持つ人と、短く持つ人との二様に定まつて居るが、握方としては「バット」の下方二三寸位を殘し、あまり長

く握らないやうにして左右の手を密接させ、充分堅く握るのと、両手の間を少し明て握るのと、二が一般に行はれて居る方法である。此等の一を取るにしても、夫れ／＼己の體格によつて取捨すべきで、力なきものが長く握るのは云ふ迄もなく、と云つて力のある者が殊更短く握るといふ事は最も不得策である。要は「バット」を握つて打た上で、何れの方法が好く當るかを定めるがよい。

#### じ「バット」の保存

「バット」は攻撃に對する唯一の武器である。て、この武器を最も大切にするのは云ふまでもないが、多くの場合打手の不注意から暴球を無理打したり、又は握り方などの悪いために、折角使ひ馴れたものを捨てねばならぬことがある。其でなくてさへ「バット」の使用期間は極く短いものであるから、暫く使ひ馴

れて調子のよくなつた頃には廢物となるのが多い。従つて常に試合用と、練習用とを區別し、なるべく丈け永く使用する様保存に心掛け、無暗に新「バット」と代へるのは不利益である。

#### (四) 打撃に關する注意

##### A 打撃の方向に就いての注意

打撃の原則としては、投手を狙つて強い火の出るやうな球を打つのである。この理由は投手と打者との距離が非常に近く、投手が球を投た後は、勢ひ姿勢が亂れて居るから、大低の場合強い球は取損ねて、遂には中堅を突破する底の安全球となるからである。

右翼の方面に向つて打たうと思つた時には、少しく遠く立ち、足はなるべく

投手の方へ向ける様にして、少し遠い球を打つと、必ず右翼に向つて飛ぶのである。それから左翼の方向に打つには、脚を投手の方面よりも少し三壘の方へ寄せて踏張るのである。併し打撃に就いて有する自己の特色は飽まても之を發揮することに力め、徒らに如何なる球をも打ち、如何なる方向にも打ち得んが爲に、折角自己の有する特長を打破して了ふのは不得策であるから、此點には與々も注意し自己の特長は何處までも保存發達させなければならぬ。

B 左利き投手に對する注意

左利きの投手は未だ日本には少ないやうであるが、右利の投手に馴れて居る打手が、突然左利投手に遇ふと随分勝手の違ふものである。兎に角左利の投手の多くは、「アウトコーナー」の方へ自然的に「カーヴ」する様である。従つて

(44)

打手は足の踏張方に注意せぬと、「バット」の中心を以つて打つことが出來ぬ。それから「スローボール」であるが、前にも云つた通り「アウトコーナー」へ自然的に「カーヴ」する癖があるのと、右利よりもアップする度が劇げしいやうであるから、足の踏張りに注意すると共に、なるべく球の上面を打つ様にせねばならぬ。殊に「カーヴ」に於ける「イン、ドロップ」は左利投手の最も得意とするところであるから、是等に就いては充分なる注意を注がねばならぬ。

C 「カーヴ」に對する注意

總て「カーヴ」する球は、普通の球よりも必ず速力が緩いものであるから、普通の球よりも少しく遅く打つやうにせぬと、大抵は「バット」が早過ることとなる。又左利投手の「アウト、カーヴ」の如きは、右利投手の「イン、カーヴ」に相

(45)

當するせいかして、その球勢が殊の外強い。て打手は足をなるべくたけ右翼の方面に踏張つて「バット」に力を入れる様にせねばならぬ。

D. 避けんとする時の注意

球を避けやうとする時に、如何なる近い球であつても、あまりに早く逃げたり、狼狽したりしてはならぬ。而して其の球が必ず「カーブ」せぬといふことを確と見極めた後でなければ逃げるのである。て急々逃げる時は脊を後にせぬ様に、後ずさりしつゝ球を見ながら後へ退かねばならぬ。

(五) 打撃順

打撃上に於て最も重要視すべきものは、チームの打撃順である。この打撃順にして其の當を得ると得ぬとは勝敗に頗る大なる關係がある。野球の母國たる

米國のごときは、この打撃順の構成に頗る意を注いで居る。米國では守備上の位置と、各プレーヤーの特長を考へて巧に組合せて仕合を行ひつゝあるが、是等の例は省略して、先づ打撃順に於て何れの邊までが、責任が重いかといふと、無論最初の打者にあるので、之れには第一壘を奪ふことに最も巧妙なる手腕を有し、且つ走壘の巧妙なる者を置き、以下順次に巧妙なる者より並べて行き、最後に投手を置くので、此の點に於ては、最近野球界は従來と大いに其面目を新にして居るのである。茲に投手を最後に置いたのは、投手は守備上の難關に當り、敵の得點を防ぐ上に多大なる努力をなす位置にあるが爲に、其の過勞の決果に起る些の故障をも氣遣ふに外ならぬ。實際打撃順を定めるには各プレーヤーの特長を利用するのは頗る得策には相違ないが、守備上の位置が比較的樂

人々からして、早く打せ、球を多く扱ふために早く疲勞する位置の人々を後に据ゑるといふことも考へねばならぬ。

米國の商賣野球團の打撃順を見るに、投手は大低九番目打者となり、次で守備に於て困難の位置にある捕手や、内野中最至難の職務を帯びる遊撃手などは第八番打者に置かれ、其他の内野手は、打撃順中の五六番目に置かれて居る。守備に於ても捕球巧みに疾走力あるを條件とされて居る外野手は、第一番目から四番目までを取るのが多い。これ等は打撃順を定める上に於て参考に資すべきとである。次に現今普通行はれて居る打撃順を擧ぐれば、最初の打者は四球を取ることに巧みなるか、最も確實に安打し得る者か、換言すれば如何なる方法かによつて第一壘を奪ふに妙を得、且つ走壘の巧みなるものを置き、第二番

目よりは順次に打撃の巧妙なるものより並べ、投手は殆んど總ての場合に最後に居り、第八番目に捕手を置くのである。但し捕手が非常な打撃の名手であるならば多少上位に置かるゝことゝあるが、併しそれは非常に稀である。

### 第三章 「バント」と犠牲球

(一) 「バント」は如何なる場合に應用すべきか。

「バント」は種々な場合に應用することは出來得るが、普通としては、

(イ) 走者の壘にある場合。  
(ロ) 無死者又は壹死者の場合。

の二つである。例へば無死者か乃至は壹死者の時に於て、走者は壹壘か又は

貳壘。さなくば壹壘貳壘の兩壘に居る場合に用ふると、「バント」は有効に利用されるのである。それから三壘に走者の居る場合であるが、此とても頗る巧妙にやれば應用されぬこともないが、かゝる時には是非共壹壘の方向に「バント」する必要がある。何故かといふと、右利の投手であると、かくして「バント」された球を取つて本壘へ投げるのは、逆動作となつて頗る投難いばかりでなく、捕手が投手の球を捕る時には勢い壹壘の方向に面して居るために、三壘から馳せ来る走者に着けるには餘分の時間がかゝるためである。左利の投手の時は右と反對の方向、即ち三壘へ向つて「バント」する方がよい。それから茲に附記して置きたいのは、走者が三壘にあつて「ヒット、アンド、ラン」をする場合である。この策戦に用ゆる「バント」は普通の「バント」とは幾分其趣を異にし

てゐる。何となれば普通に於ける「バント」は一回二回の中に成功すれば足るのであるが、「ヒット、アンド、ラン」の場合は打者と走者と合圖をして如何なる球でも打ねばならぬ責任を帯びて居る爲である。て多くはこの「バント」を應用するのであるが、必ず合圖を有効にする責任がある。飛球や「ファウル」になると、三壘の走者は見す／＼敵手に死者されるとなつて、引いては敗北の原因ともなることが多い。かゝる場合は必ず「バント」するといふ自信ある人の外は、寧ろ強い「グラウンダー」を打つ方が得策である。要するに「バント」は元來犠牲球であるから無死者の場合、一壘に走者あるか、一壘と二壘に走者ある時、打者は「バント」をなして自ら犠牲となり、二壘又は二壘三壘に走者を送るのである。而してかくすると、未だ無死者であるから、次の二打手によつて生還の機を得ん



とする期待を以て行ふのであるから、之を濫用して利ありといふとは出来ぬ。

(二) 「バント」となす時の構へ方

「バント」をなす時の姿勢は、打者の正面を投手に向け、兩足を少し曲げ氣味にして、バットは常に地上と並行に保つて居る様にせねばならぬが、而し「バント」にも一壘の方面に向つてするのと、三壘の方面に向つてするのと二つあつて、それ／＼構へ方に相違がある。

一壘の方面に「バント」をしようとする時には、本壘より少しく遠いと思ふ處に立ち、初めは普通の姿勢と同じにして居るのであるが、投手が投球動作をすると同時に、左の脚を投手の方向よりも、幾分右と思ふ處へ踏張り、之れと同時に右手を「バット」の約三分の二位の處まで伸し、右手は開いたまゝ、只「バツ

ト」を掌上に乗せて居ればよいのである。

三壘の方向に「バント」をしようとするには、前者の反對に本壘より幾分近い處に居て、左脚を三壘の方向に踏張ればよいのである。其他は凡て一壘の方向にバントする場合と同様でよい。

(三) 「バント」の打方

「バント」をするには決して球を打つてはならぬ。寧ろ「バット」を球にあてるだけでよい。而して球が「バット」に當ると同時に、少しく「バット」を後方へ引く氣味にするのである。それから投手より来る球が弱球であるか強球であるかを見分ける事が必要である。強球の來た場合には、成べく「バット」を軽く持ち速力ある球の爲めに、自分の持つ「バット」が負る位を加減にあてる方がよい。

し、弱球の来た時には、餘りに「バット」を軽く持つと「ファウル」か又は捕手に容易に捕へ得られる「フエーカー、ボール」となり易い。て、弱球には「バット」で幾分球を押す加減に當てると有効である。又前項構へ方の部に於て述べた方向、即ち壘壘か三壘の方面に「バント」をしようとするには、前者の場合にあつては二壘を眼がけて打つ様になし、後者の時には、遊撃手の方向に「バント」する心持でやると、球は三壘の方向に行くやうになる。而して後者は前者よりも「バント」が容易のやうである。といふのは、打者其人は一時も早く一壘を奪はうとする動作の上から自然的に「バット」の早く出る氣味があると同時に、打撃のスイングの習慣から、勢ひ三壘に向つてあたる様になるからである。

(四) 「バント」に關する注意

A 球に「バット」をあてる時の注意

球に「バット」をあてる時は、「バット」の上方に當ぬ様に注意せねばならぬ。かくしたる球は小さい飛球となつて「ダブル、プレー」などをやられる恐れがあるからである。て、「バント」しようとするときには、「バット」の幾分下方に當るやうにすればよい。それから「ボックス」に入つたならば、最初から球の來るのを待つて居ないで、球が來てから急に「バット」を出すと、勢い多少の力を入れて打つこととなるから、必ず不成功に畢るのである。而して球が「バット」に當つたならば、それと同時に「バット」を少しく後方へ引く加減にすると理想的「バント」をすることが出來得る。

B 「バント」をなす時の注意

「バント」したならば其の良否に關はず、直に全速力を以て壘に走つて往かねばならぬ。よく「バント」をしてから其球を氣遣つて中途で壘へ走る事を止めることがあるが、是等は頗る注意せねばならぬ。

○ 「二ストライク」後と二死者の時の注意

二「ストライク」の後に「バント」をしてそれが不幸にも「ファウル」になると、三度振と同じやうに、打者は死者となる危険がある。で、二「ストライク」後は危険な「バント」は止めて、安全打を飛ばす覺悟を持たねばならぬ。それに「バント」は先にも云つた如く犠牲球となる事が多いのであるから、二死者の時にやつては無功に畢ることが多い。

(五) 犠 牲 球

犠牲球とは字義の示す通り、自分は死者となるを期し、先に出て居る處の走者をして、次の壘を取らせる爲めに打つ球である。前に述べた「バント」の如きは即ち犠牲球であるが、今一つ外野へ大飛球を飛ばし、たとへ自分は死者となつても、一旦其球が外野手に捕られて後、三壘に居る處の走者は、初めて壘を離れて本壘を盗むこととなり、茲に立派な犠牲球となるのである。即ち走者が三壘に居て本壘を窺ふ場合、打手は自己を犠牲として右翼へ大飛球を呈すると此飛球は右翼手に確實に取られ、自分は死者となるが三壘の走者は斯と見ると同時に三壘から本壘に歸る充分な餘裕があることとなる。而して犠牲球を打つ場合は無死者か或は一死者の時、即ち自分は死者となつても次打手の居る時に限るのはいふまでもない。

## 第四章 「フリー、バッティング」

## (一) 打撃の練習の最初

打撃の姿勢が完全でなく、呼吸も充分にわからぬ内に、非常に強い球や、魔球などを投げて貰つて、打撃の練習をするのは甚だよくないやうである。何となれば強い球や魔球の如きは初心の者は恐れるので、自然と其癖がつくからである。この恐れるといふ事は本篇の最初に述べて置いた如く頗る忌むべきことであつて、かゝる癖ある人は決して好「プレイヤー」となることは出来ぬ。て此弊を生ぜぬやうにするには、初め弱い球から練習して、次第に強球や魔球に及ばす方がよい。

## (二) 打撃の秘訣

これも本編の初め「攻撃に就いて」の部に於てくども述べて置いた如く唯大膽といふ二字がその秘訣である。大膽なる打者は、必ず来る處の球も見分けられ、従て「バット」に當るやうになるからして、遂には強打者として「チーム」の重鎮となるのである。

## (三) 打撃の練習が第一

守備に就ての練習とも重きを置くべきはいふまでもないが、攻撃力の練習はより一層大切である。て練習の大部分は此打撃の練習に割かねばならぬ。打撃の練習は一面、フィールドイングの練習にもなる——といふのは、守備は如何に巧妙であつても、所詮は防禦的で、之によつて點得を争ふことは出来ぬ

一方打撃は攻撃中の主要なるもので、この力の強弱は勝敗の上に大なる關係を有するからである。かゝる大切な打撃の練習に際して、最もよく研究せねばならぬのは、

- (イ) 球を撰擇すること。  
 (ロ) バールのを止めること。  
 (ハ) 打撃の姿勢を損ぜぬこと。

と此三ヶ條である。球を撰擇するといふことは頗る大切なことであつて、安全球の如きは「ストライク」球を打つ時にのみ限られ、不正球は安全球となる事が少い。其の何れをか見分する眼力のないものや、不正球を打つ癖のある打者は、忽ち敵の「バッテリ」に弱點を見破られ、一の安全球も與へられぬ様な

衰れた状態に陥ることとなる。第二のバールといふのは、大飛球を打たう、二塁打三塁打等の如き安全球を打たうと苦心する爲に、満身の力をこめてウンと振るのである。練習に際してかゝる悪癖をつけるのは最もよくない。如何に「バット」を強く振り廻し、満身の力を込めたからといつても、決して球は飛ぶものではない。鋭くして而も眞向に當るからこそ思ふ儘に飛ぶのであるから、平常此の心掛を以て練習せねばならぬ。實際バールバつて打つと其の球を打つ瞬間には決して「バット」に入れただけの力を球に與へ得るものではない。かくの如くして練習すると、其結果は第三の打撃の姿勢を損じ、いはゞ自己流な、改めることの出来ない悪い習癖となるのであるから、以上の三項は平常の注意を要するのである。而して打撃練習の方法としては、仕合の時と同様に投手ブ

レフトに投手を立たせ、打者は「ボックス」に居て、餘り強く早くない球をのみ打つ練習をなし、決して不正球を打たぬ様に研究を積むと同時に、球によつては所謂狙打の練習をする様にした方がよい。

最後に云つて置きたいのは、練習の時に打者が左足を引いて打つ癖を矯正することである。日本のプレーヤーは多くこの癖を持つやうであるが、此悪癖は打者として禁物であるから是非矯正しなければならぬ。其の方法としてはフロントロールのある投手に球を投げさせ、左足の後方へ「バット」か或は何か便宜のものを置き、打者が打つ時に脚を引くと、それへ觸れるやうにしておくのである。而して退く時に脚が觸れる毎によく注意すると、自然にこの癖は矯正することが出来る。

#### (四) 「バント」の練習

「バント」の練習は、打撃のうちで三分の一位の時間を費すべきである。實際巧妙なる「バント」は時に一個の安全球たる價值あるものであるから、たとへ自分が不得手であるとも等閑に附しないで、打撃の練習が畢つたならば必ず「バント」の練習をせねばならぬ。

#### (五) 「チーム」全体の打撃力

「チーム」全体の打撃力を均一ならしむることは是又頗る必要の條件である。全体の打撃力が揃つて居ないことは、大體に非常なる不利を與へるのである。さらば「チーム」中に打撃力の劣つて居るものがあつたならば、之れに球の數を多く打せ、老練なる人が側について、姿勢と打方とを監督もし、指導をもし

てやらねばならぬ。

### 第五章 走 壘

#### (一) 走壘に就いて

野球に於ていつも壯快を覺ゆるのは、見事なる盗壘と、猛烈なる打撃、並に水も洩らさぬ底の美事な守備であらう。この三大要素はプレイヤーとしての必要條件で、若其一を缺かんか、決してスター、プレイヤーといふ事は出来ない。中にも走壘は勝敗に影響すること頗る大で、速かなる走壘は味方を奮勵せしむると共に、一方敵手をして心膽を寒からしむるのであつて、巧妙にして而も思

慮深き走壘は打撃と共に、強大なるタイムとしての基礎たるべきものである。さらば見事なる走壘はいかにして出來得るであらうかといふと、之は敏捷なるスタート、壘前のスライディング、打者及他の走者との連絡、コーチャーの命令とサイン、投手の動作、内野手の投球速度、其他微細にして而も種々雑多なる要素から成立するのであつて、決して迅速なる走力にのみよるものではない。隨て多くの盗壘をなす走者のみが、完全なる者といふことは出來ぬ。といふのは多く盗壘すると云ふ内面には、大なる冒險や幾度の犠牲やとに、時に失敗を伴ふからである。て苟しくも盗壘をしようとする際には、頭腦を冷靜に、充分機會を見計ひ、而も變化あり勇氣ある走壘、盗壘をせねばならぬ。處がかゝる走壘の巧拙は、いはゞ天性的であつて、練習等に依ては決して成功すべきも

のてないと思観する人もあるやうであるが、これは頗る間違つた見解であつて、かくの如き人は走壘の如何を解し能はぬ人の言葉に過ぎぬ。永久間断なき走壘の練習は、天性不器用な人であつても、必ず効果を收め得るものである。願くは以上の如き悲観的の言語を弄せず、以下記す處の走壘法によつて、研究と練習とを重ねられんことを希望する。

(二) 走壘に必要なる事項

A 走者は大膽にして而も頭腦を敏活に働かせねばならぬ。

B コーチヤーの命令には絶対に服従せねばならぬ。

走壘をなすに當つて、萬一コーチヤーが無かつたならば決して見事なる思切よき走壘は出来るものでない。而してこのコーチヤーの命令を信用せず、或は聞

き損じなどした場合には、味方の「チーム、ウォーク」を破壊する出こととなるのみならず、無意味なる徒死をせねばならぬこととなる。

C 不得手なる打者は、打者に服従し、時に犠牲とならねばならぬ。

強打者は走者を助け、不得手なる走者は、打者に服従し、而も時によつて犠牲ともなるべきは當然である。不得手なる走者はよく／＼自分の弱點を考察しその及ばざることを思ふたならば、決して無理をせず、打者をして安心せしめ、來るべき好機會を待たねばならぬ。

D 走者は打者を救ふ必要から常に投手の牽制に務めねばならぬ。

いかなる走者であるとも、打者を救ふ必要上から一投手をして戦々競々たらしむるべく牽制するのは、全く走者の義務ともいふべきである。況んや多くの



投手は、壘に走者ある場合其活動力を減ずる者であるから、この弱點を利用し打者をして名をなさしむる様充分な活動をせねばならぬ。而して又打撃順の如何を考へて前後の所置を取り、自分の死が味方の利益と思ふたならば、潔く死して味方の「チーム、ウオーク」を發揮せしむるのも亦走者の義務である。

### E 他の走者との連絡

自分一人走者となつて居る場合には、少しの無理をしても、餘り大なる影響はないが、他壘にも走者ある時には、注意の上にも注意を加へぬと、取返しのかね失策を生ずることがある。他の走者が巧妙なるものでなければ、夫だけ尙一層の注意をせぬと、思はざる危険を醸すこととなる。實際不得手なる走者と共に壘にある時程心配て心細い者はない。これに反して巧妙なる走者と共に

行動する場合は、思ひ切つてトリックも出来、實際自分の足を疑ふ位である。かくの如く二人以上走者ある場合には、頗る面倒なる者であるから、走者と走者の連絡を保つといふ事を心に留めておかねばならぬ。

### F 走者となつた時は、必ず球を見ながら走つてはならぬ。

球を打つて一壘に走る時や、スタイルなどする時に當つて、球の行衛や、球の成行きを見ながら走る人があるが、かくの如き走者は巧にスタイルすることも出来ぬし、且また立派な走壘をすることも出来ぬ。實際寸時を争ふ走壘に於て球を見ながら走るといふことは嚴禁せねばならぬ。かういふ悪癖は、悪いとは知れながらも、つい習慣性となつて、矯正することが不可能となるのであるから、一層の注意を要するのである。

G 二壘以上の走塁には、出來得る丈け壘の内側を踏み切らねばならぬ。

これも前項と同じに、一寸考へると、何でもないやうであるが、扱て實際になつて見ると、中々容易になし得ぬものである。かく實行に困難である以上、平常の練習に於てよく注意しつゝ練習する事が肝要である。さもなき時は無駄足のみ多く使つて、折角のスリーベース、ヒットも、二壘打となるか乃至は三壘の露と消える様な哀れな結果を來すこととなる。

H 如何なる場合でも、味方の死者の數を忘れぬ様注意せねばならぬ。

先攻の人も自分も、壘に出て走者となつた場合に於て第一にコーチャーを煩すのはアウトの數である。これは何人も通有性と見えてよくやることであるが既に走者となるべき第一歩即ち打者として「ボックス」に立つ時に味方のアウ

トの數は知つて居る可きである。走者となつて後初めて「コーチャー」から死者の數を聞く様な不用意なことをしてはならぬ。かゝる不用意なる人は、コーチャーなくては走塁のできぬは勿論、立派なる走塁も望むことは出來ないのである。

以上は走塁に就いての必要條件ともいふべきもので、走者の第一に注意すべき事項である。

(二) 走塁に必要な研究

A 自己の強弱を知ること。

自己を信ずることは人間の通有性ともいふべきであつて、自己の強弱は容易に知得し能はぬものである。之れが爲めに不得手なる走者も、巧妙なる走者も

共に等しき行動を執り、味方のコーチャーをば徒らに苦るしむることがある。實際巧妙なる走者が三壘を盗むよりは、拙劣な走者が二壘をステイルするのが非常に危険である。現今の中學チームなどでは、ステイルせぬと耻辱のやうに考へ違へてか、不得手なる走壘と、屢々無謀なる冒険とをなし、アウトとなつても當然の如く思つて居るやうであるが、これ等は自分の強弱を知得し居らぬ人々であつて、無責任といふよりは、寧ろ研究心に缺けたるものといつても差支はない。冒険を敢てして、チームの犠牲となるのならば致方もないが、さもなくして拙劣な技術でありながら、殊更に無謀の舉に出でたる決果、味方の不利を醸すのは頗る考へねばならぬ。要するに拙なる人も巧みなる人も、よく自己の力量を考察し、不可能のことは無理にせぬやう心掛けねばならぬ。

## B スタート

スタートなる者は、總ての勝負事は勿論、何事によらず必要なものである。殊に走壘の如き一秒の間に於て運命の決するやうなものに至ては、痛切に「スタート」の重要なことを感ずるのである。これは日々の練習に於てよく注意すれば、必ず成功の域に達することが出来る。

## C 内外野手の動作及び投球速力

走壘に當つては、如何なる場合に於ても投手のモーション、捕手の投球の巧拙、並に内外野手の投球速力等を度外視して走壘の出来得るものではない。多くの者は、投手の「モーション」に就てはこれが直接に影響を及ぼすといふ爲か、頗る研究をするが、かくの如きは盗壘の場合に於てこそ必要なもので

あれ、一般的の走塁にまで影響を及ぼすものではない。例へば走者となつて居る時に打者が安全球を打つとする。この際走者は、ワンベースだけ走らうか、ツーベースまで進まうかといふ問題が起るのである。此時に當つて豫め内外野手の投球速度や、その巧拙までも調べ置かなかつたならば、折角の安全球も、走塁の拙劣な爲に、無爲に畢ることとなるのである。故に投手の「モーション」を第一に研究し、次に捕手の巧拙、外野手の投球速度、各塁手の投捕球の巧拙如何を充分研究せねばならぬ。而して守備嚴なれば大に自重して機會の至るを待ち、若し拙ならんか、其時は注意に注意を加へて盗塁し、且つ多く走らねばならぬ。

#### D 滑り込み

(74)

塁前の滑り込みには、手より先に滑り込むのと、足部より滑り込むとの二種がある。前者の場合には、兩股と、下腹の一部と、兩腕とによつて滑り込み、決して胸を打たぬやうにするし、後者は、脊を地上に滑らして塁に着けるのであるが、これは手を先に滑り込む方法のやうに、場合に應じて、塁手の前後に滑り込むことは困難である。前者後者の何れにせよ其の場合や得手不得手に應じて行ふのは悪くはないが、唯滑り込みしたる時は直に起きて、好機を逸せぬ様に注意せねばならぬ。而して前述の二者に就て少しく優劣を述べると、以前は手より先きに滑る法が流行したが、今日の様に「スパイク」の附着した靴を使用する様になつてからは、其の手を塁手の靴で踏まれるといふ大なる危険を感ずることゝなつた。併し塁手が外塁の方に位置を取つて居る時は、時として手

(75)

より滑り込む方が利益のこともある。足から滑り込むのは、自分には危険のな  
い代り、敵手を傷けることが度々ある。而してこの危険あるが爲めに敵手に恐  
れを抱かしむるのは大なる利益となつて表はれるのである。實際手よりも足か  
ら先に滑り込むのは利益に相違ないが、之れを悪く利用して、故意に敵を傷け  
るといふことは断じて廢さねばならぬ。

(三) 各壘間は何に走壘するか。

(イ) 本壘と一壘間

A 一壘への走壘は、最も眞面目に一生懸命に突進し、寸時を争ふ  
場合には滑り込む方がよい。

打球をして走る時に、安全球を打つか、又は内野手に飛球を打つた時などは

大概歩を緩めて走る傾向がある。甚しいのは中途で走らぬ者などがある。是等  
は實に走壘に不忠實なる者であつて、タイムとして許すべからざることである  
苟もプレーヤーとして競技に加はる以上は、かゝる慣習を矯正する様に力め  
ねばならぬ。況んや一壘に向ふ場合には、例へ走り過ぎたからといつても、規  
則に示す如く只一度壘につけばよいのである。

B 走者が二壘にある時、安全球を打つた際は打者は、一舉二壘を  
突く方がよい。

現時の慣習によると、打者が安全球を飛ばして出た時は、二壘の走者は必ず  
「ホーム」に向つて突進するのである。すると、勢い外野手は本壘に投球する  
のであるから、打者は自然ツツベースを走り得るのである。

## (ロ) 一壘と二壘間

A 出来得るだけ壘より離れ、投手を牽制しつつ、進退共に便利なる姿勢を取らねばならぬ。

餘り壘側にのみかぶり付いて居るのは不利益である。初心の人は臆病の決果充分壘を離れ得られぬ様であるが、コーチヤーの助言と自分が大丈夫と思ふ自信力とによつて、充分壘を離れて居るがよい。而して咄嗟の間に進退せねばならぬのであるから、毎も必要に應じて進退されるやうな姿勢をとつて居らねばならぬ。

B 先きの壘に走者が居る時には、先きの走者に服従し、時に犠牲とならねばならぬ。

C 無死者の時は、必ず打者の犠牲球を待つやうにして、漫りに盗塁してはならぬ。

D 一死者の場合には、打者と信號を用ひて一舉三壘に向つて、「ピット、エンド、ラン」を以て奔るのも可い。

これは皆一様にかくせよと云ふのではない。速力のある走者は、斯くしても充分成功する故に、一種の「トリック」を行つても差支ないと言ふに過ぎぬ。

E 打者が右翼に安全球を打てば、必ず三壘まで走ること。

左翼や、中堅等に安全球を打つても、或場合には二壘に於て、「フオーアウト」せらるゝことがあるが、右翼に飛ばした球は、大概の場合三壘まで走つても距離の遠い爲めにセーフとなるものである。

F 二死者の場合には必ずステイルせねばならぬ。  
 二死者の後になつて、運よく安全球を飛ばしても、「ホーム、イン」するまでには、中々困難である。さればかゝる場合に於ては危険を冒して成功する外はない。而して「ステイル」する時には必ず球の飛び行く方向などを見ながら走つてはならぬ。

(ハ) 二壘と三壘間

二壘と三壘間は、走者にとつて最も注意を要すべき處である。之れは遊撃手や二壘手が、代る／＼壘に来て牽制するから、走者はよく「コーチャー」の言に従ひ、出来るだけ「スタート」をつけ、絶えず投手をして不安の念に陥らしめ、打手に充分効果ある打撃を爲さしむる様にせねばならぬ。

A 無死者の時には一壘と同様に、必ず打者の犠牲球を待たねばならぬ。  
 B 一死者又は二死者の時に、打者が安全球を打つた時は、是非とも本壘を突破せねばならぬ。而して無死者の時は、一擧「ホーム」を陥れずとも、後の好機會の來るを思つて、冒險せぬ方がよい。  
 C 打者が大飛球を、右翼又は中堅に打つた時は、直に壘に歸り、而して三壘を奪ふのである。

D 二死者の後だからといつても、慢りに盗壘してはならぬ。  
 二死者の後だからといつて徒らに、三壘に向つて突進するのは冒險極る話であつて、而も其の成功の割合は至つて少ない。て巧妙なる走者は機會を窺つて盗壘するもよいが、不得手なる走者にあつては、單に投手の牽制にのみ全力を

盡して突進せぬ方が得策である。併し現今に於ては、二壘を「ステイル」するよりは、三壘を「ステイル」する方が、幾分成功する割合を増加し來つたやうに思はれる。思ふに此は、捕手も投手も二壘の「ステイル」を防禦するには非常なる苦心もし、従つてよく練習もする様であるが、三壘は盗塁せらるゝことが少ないので、練習も不十分に苦心の度も浅いのと、走者は「スタート」を多くつけて居る爲めに、巧なる走者にとつては二壘よりは反つて三壘を盗む方が容易なのであるらう。實際この走壘法は將來はどうか知れぬけれど目下の處では、成功の割合が益々増加するのみである。

(二) 三壘と本壘

A 無死者の時に、出來得るならば「ヒット、エンド、ラン」——バントの意

てはない——を用ひて點を得るがよい。

一體からいふと、無死者の場合に、打者が犠牲球を打つて、走者を生還せしむるといふことは、餘りに消極的である。て出來得るならば一壘の方面へ安全球を飛ばして「ホーム、イン」せしめた方が利益である。

B 壹死者の時は、打者と信號を用ひ、打者の犠牲球によつて「ホーム、イン」する方が安全である。

C 打者が大飛球を外野に打ち飛ばした時は、二死者の外、如何なる場合であつても、直ちに壘に歸り、精力を蓄へて置いて本壘を突く方がよい。

D 一壘に走者ある時は、三壘に居る走者は注意に注意を加へ、一壘の走者は二壘に、三壘の走者は本壘に生還するやうな方法を執らねばならぬ。



以上に洩れたる分は走壘に関する注意の部に於て補記することゝしよう。

(四) ステイル、ホーム。

「ステイル、ホーム」とは、敵の混乱に依つてなすか、或は一點を争ふ場合に於てなす處の最も危険なる走法である。この「ステイル、ホーム」をしようとするには、第一に投手の隙を見出さねばならぬ。それは投手が捕手の「シグナル」を見つゝある時が、最も好機會であるから、この時こそ走者は必ず「スタート」する様にせねばならぬ。此際萬一にも投手が周章狼狽して悪球を投ぜんか、素より容易に壘を盗むことも出来、又「ブレイト」を外すときに、「ステップ」して直ちに投げようとする、それこそ「トウステップ」となり、「ポーク」となる恐れがある。而して投手が「ブレイト」より投げたる時に、捕手が打者の前、即

ちライン外に出づると、これも「ポーク」ともなり、又打者の妨害ともなるのである。而し苦しい經驗を持つ處の投手には全く無効ではあるが、時によつては其の經驗が反つて「ポーク」となることがあるし、投手と捕手の兩者の意志が、突差の場合に一致せぬと、間々規則に違反することゝなつて、走者は僥倖を得ることがある。

(五) 走壘に関する注意

A 盗壘の時は多く滑り込みを用ふること。

壘へ歸る時、又は突進する時に係らず、多くは滑り込みを用ひた方がよい。何となれば壘手が球をつけ難いことゝ、壘を走り抜ける——壘の場合を除く——恐れがないと云ふ利益があるからである。

## B 安全球を打つて走者となつた場合の注意。

安全球を打つと同時に一生懸命に壘壘に向つて突進せよと前章にいつた。而し一生懸命になつて居る時は、必ず其の走力に餘勢があるものであるから、其の勢に乗じて一壘を踏み越えてから、「ファウルライル」に沿つて、遠方に走り出し、而して線外を迂回して元の一壘に歸へるのは、よく注意せねばならぬ。何となれば安全球——こゝにいふ安全球とは、外野に行つた場合をいつたので、内野グラウンダーの如きヒットではない。——を飛ばした時は、多くの場合一壘上にて死者となることはないのであるから、安全球を打つたならば懸命になつて一壘に走り、壘を踏越へると直に進路を二壘の方向に執つて、敵手の失策ある場合にはより以上の壘を取らんとする動作に移らねばならぬ。と云つて

無暗に進み過ぎるのはよくないが、唯自分が刺れぬ程度まで進み、次壘を窺ふ姿勢をとり、最早進壘すべからずと見たならば、初めて壘に戻るやうにした方が有利である。

## C 投手の動作に就ての注意。

いつも盗壘に成功する人は、疾走力ある人ではなくて、機を見るに鋭敏な人といはれてゐる。即ち投手の「モーション」をよく観察するといふことも其一つであるが、それを見抜かうとするには、仕合の始まる前に、投手の投球に注意をして或る特別な癖を見けるのである。いかなる投手でも、注意して観察すると、球を投る前に當つて少しく肩を上げるとか、一寸踵を上げるとか、上體を前方に動かすとか、或は腕を張るとかいふ風に、必ず何かの癖はあるものであ

る。この特殊なる癖は、打者に對しての動作と覺つたならば、走者となつて次壘を盗まんとする際、投手がその動作をつけると同時に直に盗壘の運動を起す様にせねばならぬ。而して壘にあつては、常に投手の「モーション」と共に二三間走り出すやうにして、盗壘せぬ時は、捕手の捕球と共に、必ず壘に歸る「モーション」を取る様にせねばならぬ。

D 走らんと決心した以上、必ず遂行せねばならぬ。

このことは前項にも一寸記して置いたが、走壘の際、中途で躊躇することは嚴禁せねばならぬ。かうした行動をすると、充分取ることの出来得る壘も奪ふことが出来ず、かへつて敵の狭撃に逢ひ、馬鹿々々しい最期を遂げる様なことゝなるから、常に注意を要するのである。

E 外は油断を見せ、内は決して油断してはならぬ。

走者が壘を奪はうとする身構へが過ぎると、投手殊に捕手がそれと悟つて警戒すると同時に「ウエスト、ボール」などを投げさせ、反つて走者は裏をかかれることゝなるから、走者はなるべく呆然を装つて、壘は決して盗まぬといふ風な態度をなし、敵に油断をさせる必要がある。といつても壘を離れずに居よといふのでは決してない。唯表面の様子が呆然として敵に油断せさせやうにすれば足るので、其實内心は些の油断なく常に敵の裏に出づべく注意せねばならぬ。

F 滑り込に就ての注意。

此は「グラウンド」の性質にもよるのであるが、大抵二三間位は滑ることが

出来る。て滑る際には適當な距離を見計ひ、右の足若くは手又は左の足又は手が壘に届く位なところから滑るやうにせねばならぬ。

壘手が球の來るのを待ち構へて居る場合、若し壘手が「ライン」の上か、又は前方に立つて居た時には、壘手の後方から、丁度壘に届く位に滑るのである。それから又それと反對に壘手が「ライン」の後方に居る時は、前の方から滑らねばならぬ。以上の外滑込む場合に充分注意を要することは、なるべく壘手と衝突せぬやうにすることである。

次に滑り込には頭の方から滑るのと脚の方から滑るのと二つあるが、成可く脚の方から滑るのが安全である。敵のスパイクで負傷することがあるからである。併し時と場合によつては頭の方から滑つても必ずしも悪いと云ふのではな

いが、現今最も普通に行はれて居るのは、脚の方から滑るのである。ことに肩腕等を大切にする必要のある投手などは、一層此の點に意を用うべきである。

#### 六「コーチャー」

「コーチャー」は一壘と三壘の側に在つて、味方の走者に種々なる指揮をするばかりでなく、走者と共に投手を攪亂せしめる様にせねばならぬ。實際投手を牽制するのは、多くの場合に於て、走者の働よりも、その「コーチング」によつて、大なる效を奏するのである。而し「コーチャー」の目的とする處は、味方の走者を助くるにあるから、走者をして充分活躍せしめようとするには、鋭敏なる注意を以て投手の動作を監視すると共に自分が確實に次壘へ達せると思ふたときは、走者に次壘へ突進するように「コーチ」をし、走者の缺を補ふ

ことを務めねばならぬ。

又「コーチャー」は規則に違反せぬ限りは絶えず種々なることを云つて、走者並に打者に充分な聲援を與へるやうにしなければならぬ。其の規則といふは、

第五十八條「コーチャー」は、走者指揮行爲の範圍内に於てのみ、走者に對し走壘の助言及指揮の言を發し得るの外、其他の者に對しては發言することを得ず。

コーチャーは言語若くは相圖を以て觀衆を煽動し、物議を惹起せしむる如き行爲をなし又相手組の選手、審判者或は觀衆に直接關係に影響すべき言語を用ゆるべからざるものとす。

コーチャーは所屬組の制服を着用せる選手たる事を要し、攻撃組は一壘並に三壘方面に於けるプレイヤースラインとコーチャースラインの間に各一人を配置し得るの外、常に二人以上の選手をしてコーチャーたらしむる事を得ず。といふにあるが、これによると、唯走者に對してのみ發言し得るに止まるのである。時によつては態と投手を怒らしめんが爲めに、走者に向つて投手の不能又は、不適當なることや、かゝる投手ならば注意用心の必要なしなど、投手に聞きよがしに怒鳴ることも必要である。

以上の如く重大な任務を有する處のコーチャーは、「チーム」中の老練なるものがこの任にあたらねばならぬ。さなき時は、走者は「コーチャー」の指揮に對し充分な信用を置くことの出來ぬ爲に、充分なる活躍を試みる事が出來

ぬ。引いては味方の不利を醸すこととなるから、コーチヤーたらしむるには、必ず老練の人を撰まねばならぬ。

### 第三編 守 備

#### 第一章 總 說

普通守備に就いて述る場合には、之を内野手即ち内野を守る者と、外野手即ち外野を守る者とに分つて説くことになつて居るが、内野と云ふのは投手を中  
心とした十五間四方、即ち本壘、一壘、二壘、三壘、を結び付くる線  
によつて圍まる部分<sup>部分を云ひ、之を守る者が即ち内野手て、投手、捕手、</sup>  
一壘手、二壘手、三壘手、及び遊撃手、の六人を總稱するのである。次  
に外野と云ふのは、一壘、二壘、三壘の後方ファウル線内の部分を云ひ、之を  
守る者が即ち外野手て、左翼手、中堅手、右翼手、の三人を總稱す

るのである。

右に述べた内野手のうち、投手と捕手とは、特にバッテリと云はれて、守備に立つ場合に於てはチームの中樞ともなるべきもので、時として試合の勝負は「バッテリ」の強弱如何によるとさへ云はるのであるから、精銳の上にも精銳なることを要するのである。若しバッテリが精銳であつたならば、之によつて相手たるチームの打撃力を封鎖することが出来、相手をして勝利を得るの機会に到達せしめざることを得るのみならず、時としては味方の他の野手に多少の欠陥があつても、敵をして絶對に之に乗ずるの隙を得しめないことを得るのである。之と反對に若しバッテリが弱かつたならば、攻撃力は如何に優秀であるとも、敵のバッテリが然迄弱くない以上、勝利を得る機会からは

遠ざからねばならないのである。而して假令他の野手の技倆は如何に優秀であり精神は如何に沈着であらうとも、安打に次ぐに安打を以てせらるゝ場合には只拱手して敵に得點を與へる外なく、引いては全軍の意氣を喪沮せしめ、陣形の攪亂をも免れることが出来ない場合に立至るのである。

それから初心なチームに於ては、一般に外野手が重要視されない傾きがある。つまり内野手たることは名譽であるが、外野手たることは不名譽であるかの如く、また技倆の拙劣なる者であるかの如く、人も思ひ己も思ふやうな風習があるやうである。此は野球が今日の如く發達せず、打撃力の弱かつた時代の遺風とも云ふべく、少しく進歩せるチームに於ては、外野手の重んずべきことは、内野手に比して毫も譲るところはないのである。此の點に就いては、後章に詳

しく述べる機会もあるであらうが、一度び對外國人の仕合を目撃せるものは必ずや首肯するに躊躇しないであらう。

## 第二章 投手

### (一) 投手の資格

バッテリーの重すべきことは前に述べた如くて、投手と捕手とは恰も車の兩輪の如く、孰れを重しとし孰を輕しとする譯には往かないのであるが、若し強いて云へば、投手は多少とも敵手の打撃力に關して直接の關係を有すると云ふことが出来るであらう。従つて投手を撰び、若しくは投手に撰ばれたる場合に關する注意は餘程大切であると云はねばならぬ。

て、試みに投手として必要なる資格を擧げて見るならば、身體が丈夫で各部が圓滿に發達し、何處と云つて過不及がなく、且つ動作が輕捷で、視力が完全で、頭腦の明敏なこと、冷靜沈着なこと、肩の強いこと、此等は必ずしも投手に限つて必要なる資格と云ふことは出来ない。他の野手と雖も等しく必要なる資格である。併し上にも述べた如く投手はチームに於て極めて重要なる地位を占める者であるから、成可く以上の資格を完全に具備して居ることが必要である。

次に投手の最も重要なる職務は、云ふまでもなく投球にあるのであるから、此點から云つて他の野手に比して、幾分特殊なる資格を必要とするのである。即ち先天的に球にコントロールのあることである。コントロールと云へば俗に



云ふ「的の定つて居る」ことで、自分の投げようと思ふところへ自由に確實に投げることの出来るのを云ふのである。無論此は練習の結果得られないこともないが、生れつきコントロールのある者には如何しても及ばない。既に投手と云ふ以上、肩の強いことが必要なる條件であることは、殆んど云ふを要しないところであるが、如何に強球を投げ得るとも、此のコントロールを缺いて居たならば、其人は到底立派なる投手たることを得ないのである、従つて投げた球の自然にカーブする癖のある者が、投手として不適當であることは云はずして明かであらう。つまりカーブさせようとも思はないのにカーブするようなのは、他面から云へばコントロールの缺けて居ることを示すものである。

## (二) 練習法

前にも述べた如く投手の職分の最も重要なる部分は投球に在るのであるから、其の練習法も亦投球の練習が最も重要であると云はねばならぬ。處て投球の練習をするとした場合に、初心者の最も陥り易いことは、何でも熱心な練習が必要であると云ふところから、無暗に過激な練習を試みることである。人間の精力には限りがあるから、程度を忘れて餘りに使ひ過すと其爲めに折角大切な肩を全然こはして了ふのである。天性肩の強い人が、強いに任せて餘りに肩を虐使した爲に、肩を痛めた例は、我が野球界に於ても、其の實例に乏しくないのである。

初心者の練習法としては、先づ眞直なストライキ球で、其の次が魔球、それからコントロールの練習であるが、コントロールを練習するには捕手に指圖

して貰つて、高いの低いの、遠いの近いのと、初めは眞直な球、それから魔球と、順次に練習して往くのである。以上の練習が積めば、今度は更に進んで投手の位置に就いての練習で、此時には無論捕手もつけ、打者をもつけてやるので、此の場合には單に投球のみならず、打者の姿勢や打方によつて其の弱點の研究をも試みねばならぬ。

次に練習の際に投ぐべき球の数は、約百五六十で、はじめは弱く、次は稍強く、最後は全力を盡して投げるのである。それから時々は新らしい球で練習することも必要である。何故ならば新らしい球では魔球が出難いからである。それからプレートに就いて練習する場合には、内野手としての練習をも等閑に付してはならない。即ち打たれたる球に對する處置、走者の牽制、各塁の守備者

たること等、内野手たるの技倆に熟達するやう心掛けねばならぬ。

### (三) 肩の衛生

投手の生命は一面から云へば肩にあると云つても可いのであるから、肩をこはさぬやうに注意し、且つ出来る丈け肩の生命を長からしむやう注意することが必要である。先づ第一は常に肩を保護して居ること、即ち直接に肩を外氣に觸れしめず、又冷熱に關らず強烈なる刺戟に觸れしめないやう用心すること、練習や仕合の済んだ後では必ず毛糸のシャツを着て居るやうにしなければならぬ。それから練習又は仕合の後には、右手を水の中に入れてタオルで強く摩擦し、其後を乾いた手拭で拭き、寝る時には手を以て軽く揉んで貰ひ、更に其後をこするので、暴飲暴食、其他の不衛生を謹むべきは、云ふまでもないこ

とてなる。

以上の注意を忘れさへしなければ肩を痛めることはない筈であるが、若し何等かの原因で痛めた時には、アーニカとかウキツチヘーブルとか云ふ薬もあり、アルコールをつけて摩擦するのも一法であるが、毎日弱い球を二三十位投げて、自然に恢復するのを待つより外はない。

#### (四) 内野手としての投手

他の野手と同じく己れの近所に來た球は、ライナーでもグラウンダーでも、強弱に關はらず、直ぐに捕つて適當なる處置をとらねばならぬが、ことに注意すべきことは、打者のバントせる球を成可く早く片手で捕つて適當なる壘手に投げることである。それから今一つは走者を牽制すること、成可く壘から遠

く離れさせないようによつてすることである。此の二つは投球に次いで投手の最も意を用ふべき點で、敵に與へたる一二の安打は此等の點によつて補ひ得るとさへ云はれて居る。其次は一壘及び其他の壘の空虛となつた場合には、必ず其後を充たさねばならぬこと、外野から本壘または一壘に球を送らるゝ場合に、其の後ろを守ることを注意し、三壘打を打たれた時は三壘手の後衛とならねばならぬ。

#### (五) 投球上の注意

第一に投手は飽までも冷靜でなければならぬ。而して敵を苦しむることに就いては有らんかぎりの手段を弄しなければならぬ。たとへば打者がボックスに入つてぼんやりして居る時に好球を投げてストライキをとつたり、第一球を打

者の頭へ向けて投げて敵を脅かしたりする如き其の例である。

先づ投球に關する一般の原則を云へば、直球にもせよ、魔球にせよ、本壘の真中を通る球または打者の胸腰の邊など、打者から云つておあつらへ向の球を投げないやうに注意し、成るべくイン、コーナーを通る球若くはアウト、コーナーを通る球、高さを云へば丁度打者の肩の邊または膝の邊を通る球を投げるやうにしなければならぬ。併し多くの打者には夫々得意の場所があるものであるから、高低と云ひ遠近と云ひ、其の得意の點丈けは避けなければならぬ。次に打者の位置から云へば、本壘に近く立つて居るものには近くて早い球、遠く立つて居るものにはアウトコーナーを通る球を投げ、左の足を後ろに引いて打つ癖のある者にも矢張りアウトコーナーを通る球が有効で、打つ時に股を大

きく擴げる者には高い肩の邊を通る球が有効である。

それから投げる時に絶えずプレートの上の位置を左右に變ずることが必要で、つまり此によつて球の方向を變じて敵を苦しめ、又時とする己の球の癖を矯めてストライキボールを出すことさへも出来るのである。それと同時に投げる時に踏み出す左の足の踏張り方を左右に變ずれば更に其効力は顯著となるのである。

それから如何に強球でも常に同一速度の球を投げると、相手の打者が慣れて了ふ恐れがあるから、時々其の速力を變へなければならぬ。而して其の場合に注意すべきは常に同じ動作で投げると云ふことである。斯くすれば非常に速い球の間に緩い球が来るのであるから、打者はそれに釣込まれるのである。添て

に緩球スローボールに就いて云へば、無論打者の肩のあたりへ落ちるのと膝のあたりへ落ちるのとは投ぐべきであるが、日本人に對してはむしろ膝のあたりへ落ちるのがより多く有効だと云はれて居る。

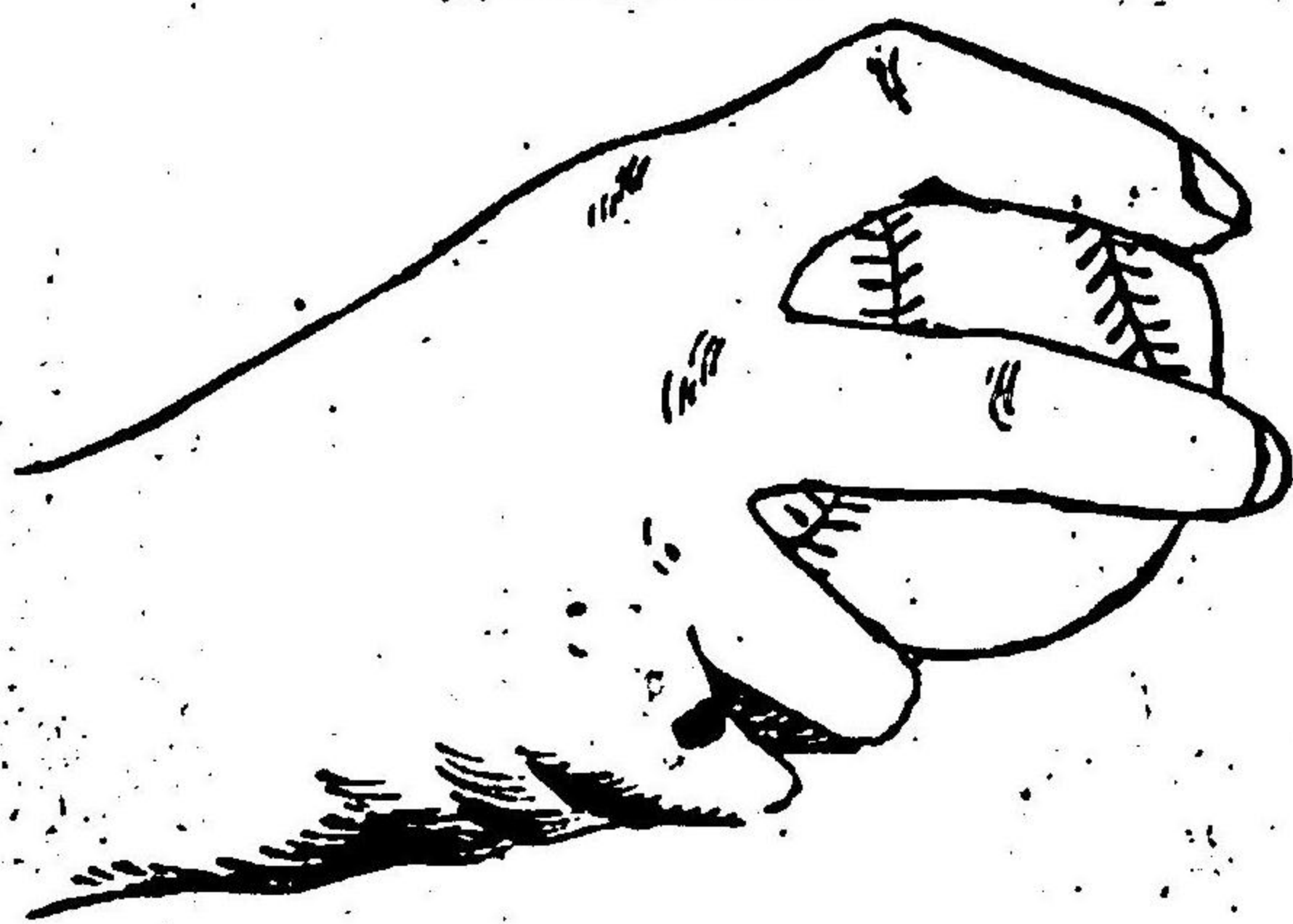
次に若し敵がバントしようとする氣配が見えたならば、高い球を投るやうにしなければならぬ。高い球は打者に打難く且つ小飛球となり易いからである。それから敵が「ヒット、エンド、ラン」をやらうとすることが分つたならば、捕手と合圖して打者がボックス外に出なければ打てないやうな遠い球を投げなければならぬ。

仕合の時 四球が續けさまに出たり、敵から續けさまに安打せらるゝやうな場合に出逢つたならば、決してあせつては不可ない。成る可く氣を落ちつけ

て、休みつゝ靜かに間を置いて投げ、此までと違つた投げ方、即ち今まで主としてオパースローを用ゐて居たならば、今度はサイドスローと云つた風にして、他の方面には成る可く氣を散らさずに、投球にのみ精力を集中しなければならぬ。

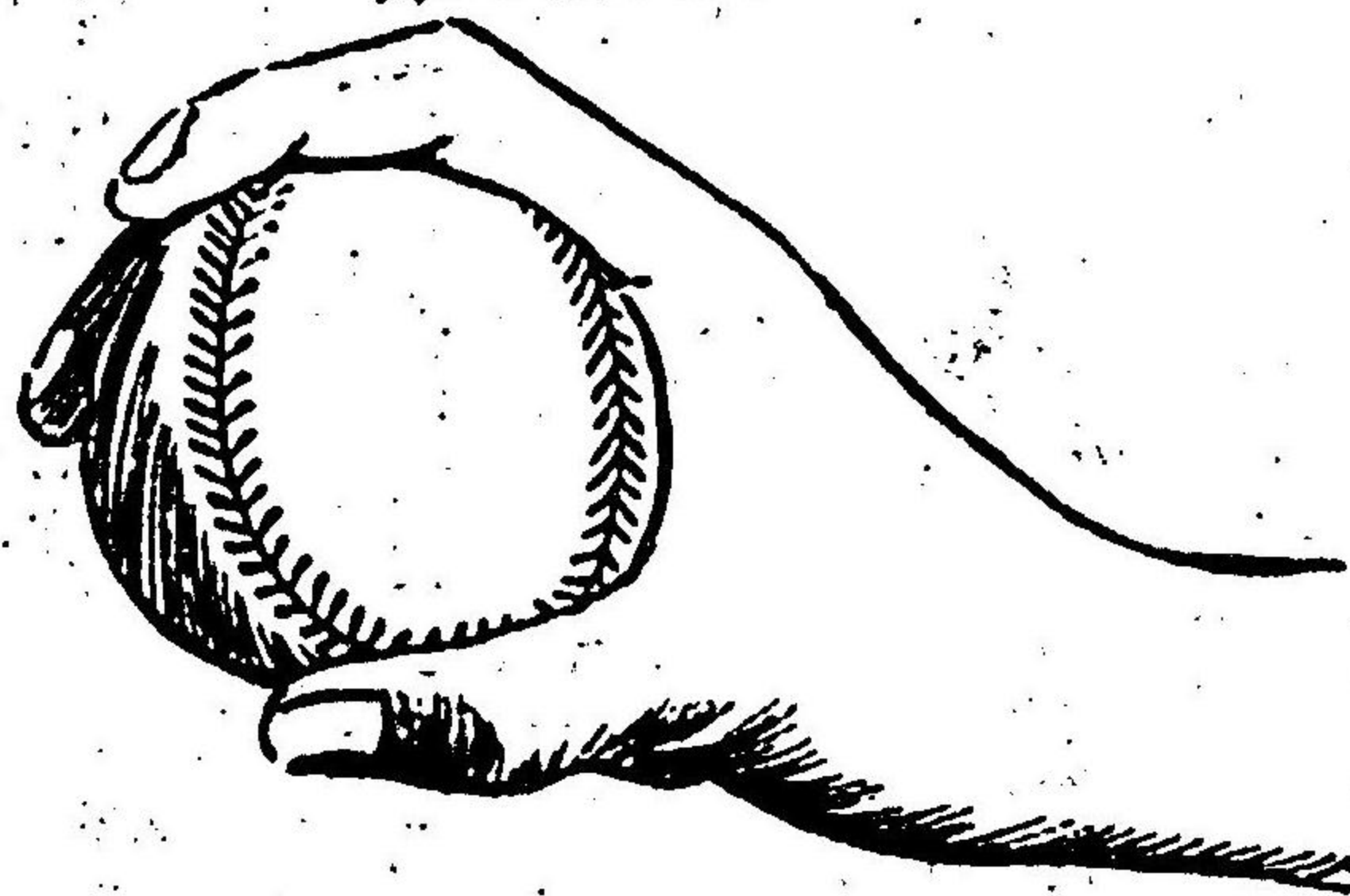
近來は多少こそあれポデースキングをやらない投手は居なくなつたが、之は投手にとつて頗る必要なことで、靜止の状態から急に激しい運動の状態に移るのは比較的困難であるが、ポデースキングをやれば此の困難から救はれることが出来るのである。猶其外に打者をして何時球が来るか待ち受けることを得しめないと云ふ利益があり、スローボールを投げようとする場合に、ポデースキングをやれば強い球を投げる時と同じ動作で投げる事が出来るのである。併

「ルーポトートス」の投る時握り方  
上より見たる



同

下より見たる



し走者の塁に居る時には決して之を用ゐてはならぬ。少しでもポデリスキングをやれば打者へ投げる動作をやつたものと認められるから、是非本塁の方へ投げねばならず、機敏な走者の爲めに見すく、塁を盗まれねばならぬやうな端目に陥るからである。

(六) 魔球

カーツを出すには二種類あつて、球の握り方に重きを置くものと、捻り方に重きを置くものと二種あるが、日本人の如く指の短かい者には握り方を主とした方が具合が好い。大體普通に行はるゝ魔球は、アウト・カーツ、ドロブ・カーツ、アウト・ドロップ、インカーツの四種であるが、茲には便宜の爲め前に述べたスロー、ボール及びスピット・ボールをも一緒に述べることにする。魔球の投

方に先つて二應直球ストリートボールの投方に就いて述べて置く必要があるので、普通の場合直球は圖の如く球の縫目の處に人さし指と中指とを當てし、オバースローで投げるのである。

次にアウト・カーブは直球の握方の、人さし指を中指の方によせて、サイドスローまたはアンダースローで球に右から左への廻轉クワイールを與へるやうに捻りつゝ投るのである。而して腕を後へずつと引いて成可く前へ延して投るとカーブが大きくなり、球を早く離せば捕手の左の方、遅く離せば右の方で捕手の手に入りアンダースローで投げる場合には、身體をゆり上るやうにして投げると球が捕手の所へ往つて下るやうなことがない。

ドロップカーブはアウトカーブと同じ握り方をして、オバー、スローで手首

を捻つて球に上から下への廻轉クワイールを與へるので、成るべく上方から成るべく地面に近く手を動かせばカーブは大きくなり、股を狭く踏張つて投げれば己れの丈を高くすることが出来るから、カーブも従つて大きくなる。

アウト、ドロップは前と同じ握り方で、オヴァー、スローとサイド、スローとの中間から、斜めに下方へ向けて投げるのである。

インカーブはストレート、ボールの握方の、中指を人さし指の方へ寄せてサイド、スローでアウト、カーブの場合と反對の廻轉を球に與へつゝ投げるのである。此の場合にも矢張りオヴァー、スローとサイドスローとの中間から斜めに投げるとイン、ドロップが出るが、此は極めて困難である。

スローボールはちよいとつまんで投げるのが一つの方法、今一つは小指と拇

指で持つたまゝ、投げるので、これならば強い球と同じ動作で投げるには便利が好い。スピット、ボールは中指と人さし指にべつたりと唾液をつけて、オツアースローで投げるのであるが、普通は、ドロップし、時としてイン、ドロップもするが、自然的に球に癖のある人は、其の癖の方にカーブするのである。

### (七) 投手としての心得

常に敵の弱點を看破することに注意して居り、此まで仕合をやつたことのあるチームならば捕手と相談して、其の長所と弱點とをよく研究してプレートに立つと共に、自己の欠點をも研究して再び其の欠點を繰返さないやうに注意しなければならぬ。無論此等のことは絶えず念頭に置いて居なければならぬが、併し神経的にびくびくしてはならぬ。堂々たる抱負と自信とを持つて敵に向ふ

べきである。それから仕合の開始前に練習する時は、前に云つた通り始めは弱く、中頃は稍強く、最後に二十許り力一配に投げるのである。而してフキールディングの練習の時は決して自らノッカーとならないやうに注意しなければならぬ。

## 第三章 捕手

### (一) 捕手たる資格

捕手の任務の主なるものは、投手の球を確實に捕り得ること、必要に應じて出来る丈け早く他の壘に球を送り得ること、本壘に突入する走者を確實に喰止め得ることである。従つて捕手に必要なる資格は、如上の點から割出さる



べきで、若し體格の上からして、特に捕手に必要な資格を擧ぐるならば、成る可く身體が大きく丈が高く體量の重い者である。つまり斯る體格を備へた者は、高い球底い球、遠近強弱を問はず、投手の球を捕るに便利であり且つ確實であり、三壘より突入する走者の衝突をも立派に喰止めることが出来るからである。夫から肩の強いこと、動作の輕捷なこと、これは他の野手とても同様であるが、捕手は他の壘ごとに二壘などへ球を送る場合には、取り分け急速確實を要するからである。其の次に技倆上の特色として捕球に熟達して居る必要のあることは、捕手と云ふ職掌上云ふまでもないことである。

## (二) 投手との聯絡

捕手は常に投手に對して、種々なる信號によつて己の欲する球を投げさせる

のである。従つて捕手は出来る丈け早く打者の弱點を看破して、其點へ直球と魔球とを問はず、或は肩の邊或は膝の邊の、コーナーボールを投げさせねばならぬ。従つて之に對する合圖を豫め投手との間に定めて置く必要があるのである。而して合圖をする場合には、成る可く敵に看破されないやう、股の下で「ミット」の蔭でするやうにし、敵の走者が二壘に居る場合には、夫々合圖を變へなければならぬ。然もないと敵に看破せらるゝ恐があるからである。

捕手から投手に對する合圖が必要であると共に、捕手の合圖を投手が不適當と思つた場合に、投手から捕手にする合圖をも作つて置く必要がある。それから既に合圖を終つて投手に投げさせようとする時には、兩手を擴げて投手に目標をつけさせて、投球を便利にしてやらねばならぬ。

## (三) 捕球に對する注意

捕手は一塁手と同じくミットを用ふることを許されて居るが、如何なるミットを撰ぶべきかと云はじ、成るべく大なるミットを用ゐた方が、球を捕るに便利が可いのである。と云つて自分の體格、若くは力量不相應に大なるものを用ゐよと云ふのではない。自分の力で自由自在に動かすことが出来る範圍内に於て出来るだけ大なるものを撰べよと云ふのである。而して規則に抵觸せざるやう注意すべきは無論である。既にミットの選擇が終つたならば今度はミットの中央部を滑くすることを忘れてはならぬ。由來球を捕る場合に片手を用ゐることは原則としては最も妥むべきことではあるが、時としては両手を使用することの出来ない場合がある。其の場合に於ては止むなく片手を用ゐねばならぬ

が、若しミットの中央を滑くして置かなかつたならば、其の場合に球を抑えつけることは出来るかも知れぬが、到底確實に之を捕へることは出来ないのである。次に捕手の注意すべきことは捕球の姿勢で、其位置に就いた時に、成可く兩脚を開いて立たないやうにし、且つ少しく前に屈加減に構へて居るのである。總うしなければ投手の球が左右に反れて來た時に自由に身體を動かすことが出来ず、又高い球に飛び付いたり、低い球を止めることが出来ないからである。而して常に一定の姿勢をとつて居ることが必要で、これは投手をして投球に硬弱ならしむる爲である。

最後に捕球する時の位置に就いて云へば、普通は規則に定められたる範圍を

出てざる限り、自分の最も便利と思ふところに居て可いのであるが、壘に走者の居る場合には多少之に應ずる變化が必要である。一壘に走者の居る時には必要に應じて二壘に球を送らねばならないから、左足を出して投手から來た球を捕らねばならん。左足を前に出せば自然と右肩が後ろに退けるやうになるから非常に急速な動作を以て、突嗟の間にも二壘へ投ることが出来るからである。特別に肩の強い者はいざ知らず、先づ普通の者では足を踏張らないで、急速な動作を以て強球を送ることは、非常な難事である。次に二壘に走者の居る場合には、捕手は普通よりも少しく後ろに退つて、十呎線の側に居なければ、打者が邪魔になつて三壘が見えないから、捕球すると同時に投ることが出来ない。三壘の走者が本壘に突入する場合には、本壘の前に出て、三壘の方に少しく寄

る氣味の處で球をつけねばならん。而して此の場合には球をつける時に成る可く兩手でしつかりと球を握り且つをさへて居なければ、走者に衝突せられて落されることが少くない。

それからファウルボールの捕方に就いて云へば、第一直ぐにマスクを外さねばならぬ。マスクを當てたまへてはボールの所在を知るに困難だし、捕ることは無論である。而して元來ファウルフライなるものが、打ち損ねた球なので、總ての場合妙にされて居るから、常に思ひの外遠方へ落ちる傾がある。従つて球が高く空中に在る時丁度頭の真上に見て居るやうにすると丁度胸の處へ落ちて來るから、其積りて居なければならん。既にファウルフライを捕つたならば普通のフライを捕つた場合と同じ價值を有するのであるから、直ぐに走者に對

して適當なる處置を講ずることを忘れてはならぬ。最後に外野手はもとより一般に野手から捕手へ球を送らるゝ場合には、投手に對する時と同じく、兩手を擴げて目標を與へることを忘れてはならぬ。

(四) 投球に關する注意

捕手は他の必要な限り投手から投げられた球を常に投手に返すのであるが、其場合成る可く投手の捕り易い球を送り、出来る丈け投手を疲勞せしめないやうにしなければならぬ。従つて壘に走者の居ない時など必ずしも強い球を返す必要はないのであるが、併し打者が空振などして姿勢の崩れたのに乗じて投手に投球せしめようとする場合など、迅速且確實に、待ち構へて居る投手の手に適宜なる速度の球を返すよう注意せねばならぬ。

それから壘手に球を送る場合には、成可く高い球を投げないやうに、寧ろ低い球を投げる必要である。餘りに高い球は如何なる名手も如何ともし難いが、低い球ならば少くとも之を止める丈けのことは出来るし、時として走者を殺すことあるも出来るからである。次に壘手に投る時には、必ず壘に向けて投げ、決して其の壘に歸りつゝある野手に向けて投げないやうに注意すること。が肝要である。而して少しく壘の右に若くは左に投げるやうな氣味にして、壘に返る野手と逆動作になるやうな箇所へ投げないやう注意せねばならぬ。

(五) 捕手の心得

先づ第一は投手に元氣をつけることである。これは他の野手とても同じく力むべきことであるが、捕手は殊に其の關係連絡が密接であるからに、其の影響

も他に比して大なのである。投手とても時とすれば比較的出来の悪い時もあるに相違ないから、然う云ふ場合にはとり分け投手に同情して、之を鼓舞激勵し、其の技倆を恢復せしむることに力むべきで、投手の出来の悪い時に捕手としてやける如きは、最も戒むべきことである。

それから前にも一寸云つた如く、打者の弱點と長所とを、出来る丈け早く看破すること、打者の姿勢、若くは構へ方、若くは打ち方等によつて、其の癖を看破することである。而して出来る丈け其長所を避け、弱點に乗ずるやう、投手に合圖するのである。

最後に注意すべきことは、捕手は他の野手と反對に、味方の陣形を一目に見得るやうな地位にあるのであるから、絶えず味方の陣形に對する注意を怠ら

ず、何等かの事情によつて陣形の崩れたる時、若くは特殊に変更を要すべき場合には夫々適宜の注意を忘れてはならん。

#### (六) 練習法

捕手の職務の大部分が投手に密接な關係を持つて居る丈けに、練習の場合に當つても前に投手の時云つた通り、投手と共同して捕球投球に熟練せねばならぬ。それから次に定位置に就いて、打者を置いての練習は無論必要である。其の場合にファウルの捕方、他の壘への投球、乃至野手からの投球に對する捕球をも練習するのである。但し時とすると此場合には負傷することがあるから。試合前などには成るべくやらないようにせねばならぬ。而してフキールディングの練習の時、ノッカーに種々なる球を打つて貰つて練習するのである。

## 第四章 一壘手

### (一) 一壘手の資格

先づ體格に就いて云へば、孰れかと云へば體格のすらりとした、四肢の充分に發達した者を撰ぶべきである。壹壘手の最も頻繁なる務めの一つは、本壘から來る走者を殺すことであるが、此の場合には必ずしも球をつける必要はなく、只身體の一部、多くは、脚の踵または爪先をつけて球を捕りさへすれば好いからである。それから今一つの資格とも云ふべきは、強打手であることである。此は元來一壘手の職分が、捕球の一事を以つて覆はるゝが如き傾きがあり、打撃の研究に充分なる意を致すことが出来るからである。

### (二) 一壘手の位地

普通の場合には、貳壘の方向に三四間、ラインの後方三四間位の處であるが、敵のバントに備ふる必要のある時は、ラインの前方二間位まで進むのである。また走者が第一壘に居る時は、餘り壘を離れないやうにし、離れても時々歸つて絶えず其の走者を牽制し、走者の邪魔にならぬやう、少しく本壘に近き方に居ることが必要である。左利の打者に對しては多少普通よりも右方の後方に寄ることが必要である。

### (三) 捕球の注意

一壘手も亦捕手と同じくミットを用ふることを許されて居るが、矢張りミットは中央を薄くして、片手で捕球する場合の便利を計らねばならぬ。無論此の

場合にも、片手で捕ると云ふことは、高い球とか、遠い球とか、乃至は走者の爲とかで、両手を以てしては到底捕ることの出来ない場合であることを忘れてはならぬ。

前にも云つた通り、本壘から来る走者を殺す場合には、早く球を捕りさへすれば可いのであるから、踵若くは爪先を壘につけたまゝ、成る可く身體と手とを伸して球を捕るべきである。併し非常に高いとか、非常に遠いとかで、到底壘に觸れたまゝでは捕ることの出来ない場合には、後ろに逸するよりも優であるから壘から離れて捕るべきである。

次に球を待つ時の構へ方に就いて云へば、成可く手足を伸して捕ると云ひ條、始めから片足を出来る丈け踏張つて構へて居ると、啞蹉の變化に應ずるこ

とが出来ないから、先づ壘の二壘に面する邊と本壘に面する邊とに左右の脚をつけて立つて居るのである。然うすれば球が左へ来れば左の脚を、右へ来れば右の脚を伸すと云ふ風に、自在に變化することが出来る。而して一旦球を手にしたならば、直に壘を離れて、走者との衝突を避けるやう注意すべきである。而して他壘に走者なき場合には、其球を直ぐに投手に返さないうて、遊撃手又は三壘手にグラウンダーを投げてやつて、次の打者が位置に就くまでの時間を練習に利用することを忘れてはならぬ。

#### (四) 他の野手との連絡

先づ捕手との連絡に就いて云へば、走者が本壘から一壘へ来る場合に、捕手から球を送らるゝ場合には、ラインの通りに居ては走者に遮らるゝから、左

右いづれか走者の走つて来る方向と、捕手の位置とによつて、都合の好い方に身體を出して捕らねばならぬ。ラインに近きバントなどを投手が拾つて投げる時にも之と同様である。それから走者が一壘にある時は、之を殺し若くは牽制せんが爲めに、投手はもとより捕手からも、咄嗟に疾球を送らるゝから、絶えず其に注意して居なければならぬ。

次に二壘手との連絡に就いて云へば、之は主として第一壘に走者のある場合に起ること、若し此の時自分の處に球を打たれたならば、直ぐ之を取つて第二壘に投げれば、其の走者をフォースアウトにすることが出来、更に第一壘に在つて第二壘から返さるゝ球を捕る時は、屢々本壘から来る走者をアウトすることが出来るのである。所謂ダブルプレーなるものである。併し此の場合に注

意すべきことは、果してダブルプレーを行ふことが出来るか否かを迅速に看破ることである。若し徒らにダブルプレーを行ふことにのみ心を奪はるゝ時は孰れをも生して了ふやうなことがあるから、呉々も注意せねばならぬ。それから孰れの走者を殺す方がより多く利益であるかと云へば、第二壘に向つて進む走者を殺した方が、非常な利益である。

次に三壘手との連絡であるが、之には色々の場合があつて、第一は第一壘及び第二壘に走者の居る場合には、自分の處へ打たれた球は直ぐに三壘へ投げて二壘の走者をフォースアウトにしなければならぬ。併し此の場合にも矢張り間に合ふか否かを早く看破する必要がある。第二は第二壘に走者の居る時に第三壘の方向に球を打たれたならば、其走者は球が第一壘手の方に投げらるゝを待つて



走り出すから、直ぐに其の球を三壘に返さねばならぬ。第三は第一壘に走者が居てヒット・アンド・ランを試みた場合、若くは其他の場合に於て、走者が快速力を有する者であつたならば時とすると第二壘から更に第三壘までも突進することがあるから、本壘から来る走者を殺したならば、直ぐに其球を三壘に送ることを忘れてはならぬ。第四に第三壘に走者の居る時は、其走者は本壘に突入しようとして居るから、必要に應じて本壘に投げることを忘れてはならぬ。がそれと同時にまた其方にのみ心を奪はれて、本壘から一壘に向つて乗る走者をアウトにすることを怠つてはならぬ。第五にスリーベース・ヒット又はホームラン・ヒットを打たれた場合には、投手は直ぐに三壘の後衛となるから、一壘手は直ぐに本壘に走つて捕手の後衛となることを忘れてはならぬ。

(五) 打者に対する注意

先づ第一に打者の打つた球の方向を迅速に見分けることが肝要で、若し自分の方向に來なかつたならば、直に走つて壘へ返らねばならぬが、投手、二壘手、右翼手など、一壘手との間に球を投たれた場合など、平素の練習に於てよく相互の聯絡をとつて置かなければ、或は自分の取るべき範圍でない球を取つたり、又は己の取るべきものを見す／＼人に譲つたりして敵を生ずやうな醜態を演ずることが少くない。先づ大體から云へば自分の近くへ來る球は別として然もない球は多くの場合他の野手に任せて、自分は壘に歸る方が安全である。又敵がバントせんとした場合には、前進して之に備ふべきは勿論であるが、此れまた投手との聯絡が充分でないと双方から譲り合つて敵を生したり、無暗に前

進して三壘の方へバントせられた爲め第一壘で殺すことが出来なかつたりするから大いに注意せねばならぬ。

## 第五章 二壘手

### (一) 二壘手の位置

普通二壘手の備へて居るべき位置は、第二壘から第一壘に向つて五六間離れ、ラインの後方三四間位の處であるが、打者が左利であるとか、乃至は打者の打撃に特殊の癖があるとか、若くは打者がバントすることが分つて居るとか云ふ時には、前に一壘手の場合に云つて置いた處に準じて、其位置を左右前後に變換することが必要である。それから第二壘に走者の居る場合には、遊撃

手と代るゝ之が牽制の任に當らねばならず、また第一壘に走者の居る場合には、其の走者は常に第二壘を奪はうとして居るのであるから、絶えず之に應ずるの準備を怠つてはならぬ。猶ほ此の點に關しては後章に於て、他の野手との關係に就いて陳べる場合に、詳しく語ることにする。

### (二) 投手及び捕手との連絡

先づ投手との連絡に就いて云へば、其の最も普通に起る場合は、第二壘に走者が居て、第三壘を窺つて居る場合である。此の場合二壘手たる者が、徒らに打者のみに備ふるに汲々として、走者の牽制を怠るやうなことがあつてはならないと同時に、反對に走者の牽制のみに氣を取られて、打者に對する備を怠つてはならない。従つて此の二つの任務を完全に果すには、如何しても時々壘に

歸つて遊撃手と交互に走者の牽制に當る外はないのである。殊に投手が走者を牽制する爲に投る球は非常にスピードの速い球であり、且つ時とすると打者に逆モーションとなるべき箇所を狙つて打るゝ恐があるから、壘に歸つたり出たりするのは餘程投手との連絡を注意しなければならぬ。而して大體から云へば餘り多く壘を離れるのは不得策である。て、此の連絡運動を確實ならしむるが爲には、豫め合圖を定めて置く必要があるので、其の合圖は普通捕手がやり、其に従つて投手は球を投げ二壘手は壘に歸るのである。而して前にも一寸云つた通り此の牽制運動は、遊撃手と交るゝ行ふことによつて一層有效なる成績を擧げ得らるゝのは云ふまでもない。

次に捕手から二壘に球を送らるゝ場合は、一壘に據れる走者が二壘を襲はん

として居る時である。此の場合に遊撃手が刺殺の任に當るか否かは、兩者の技術、打者の打撃の習癖等より打算して、豫め連絡をとつて置くべきである。無論此の場合には幾分壘に近く陣するやうにするのを適當なる手段と云はねばならぬ。併し茲に注意すべきは一壘に居る走者の動作につられて、餘りに早く壘へ歸らないやうにすること、投手の投げた球が打者まで届いた後始めて適宜に動作すべきである。さもなければ切角壘を離れて打者に備へて居る甲斐は少しもなくなるのである。

### (三) 他の野手との連絡

先づ一壘手との連絡から云へば、一壘手が打者のバント其他の球を捕りに出た時、走つて其の空虚を満たして、自ら一壘手の任務を果すのである。併し之は

極めて稀まれに起ることである。それから一壘に走者の居る時、又は一壘二壘に走者の居る時、自分の處へ球を打たれた時は勿論、遊撃手、三壘手、一壘手、時としては中堅手其他の外野手に、フライや、グラウンダーや、ライナーや、種々の球を打たれた時に、之をフォース、アウトにし若くはダブルプレーを行ふことを忘れてはならぬ。それから三壘の走者が、打者の打球によつて本壘に突つ入こせんと試みた場合にも、之に對して適宜てきぎの處置しよちをとらねばならぬ。要するに此等こゝろに關する要領えうりやうは、前に一壘手に就いて陳べた場合のそれを參考さんかうすれば、多少の研究けんきゆうによつて直ちに了解りやうかいすることが出来るのである。

## 第六章 三壘手

(138)

### (一) 三壘手の位置

普通は三壘の右二間半から三間半の處で、ラインの少し前であるが、此また打者の癖くせや、バントに備ふる時や、走者の三壘に居る時やによつて、多少とも左右遠近を加減かへんしなければならぬ。ことに走者が三壘に據つて居る時など、投手はもとより捕手とも其の距離きょりが近いから、餘程注意よほどして居なければならぬ。而して一間半位以上壘を離れない方が得策とくさくである。

### (二) 三壘手に望ましき條件

三壘手の最も必要ひつやうとするのは、フキールディングに熟達じゆくたつして居ること、ことにグラウンダーを捕るに至妙しひやくの技を有することである。而して必要に應じては右の手のみで球を撥つかんで投げる事が出来ねばならぬ。バントに對する時など云

(139)

ふまでもない。それから投球にも熟達して居ることが必要で、バントや、三壘の後へ打たれた球を一壘、本壘若くは他の壘へ送るときは、真に一瞬を争ふ場合が多いからである。

(三) 三壘手に對する注意

前に一壘手及び二壘手等の場合に陳べた如く、他の野手との連絡に注意し、投手及び捕手と共に三壘の走者を牽制するのは無論、其の場合に應じて走者をフォースアウトとし、若くはダブルプレーを行ふことを忘れてはならぬ。

其外には遊撃手の前に来た緩いグラウンダーを捕つて、一壘若くは他の適當なる壘に送ることが必要である。第一時間の上に於て利益があるのみならず、遊撃の後衛を有するから、安全と云ふ點に於ても大いに優つて居るのである。

それから二壘若くは三壘に走者の居る場合には、二死者後でない限り、且つ三壘若くは本壘でフォースアウトにすることが出来ない限り、一壘に投げて走者を殺すべきであるが、併しよく二壘若くは三壘の走者に注意して投げなければならぬ。強いグラウンダーなど餘りに早く投げると、一壘手から球が歸るまでに、機敏なる走者の爲めに易々として三壘又は本壘を陥れらるゝことがある。而して投げて了つたら直ぐに壘に歸つて、その走者に備ふべきは云ふまでもない。

それから二壘から走者の走つて来る場合に捕手から球を投げられたならば、出来る丈け壘の二壘に近き方面に居て、球を兩手で攫んだまゝ左にまはして走者につけねばならぬ。但し止を得ない場合は此の限りではない。

## 第七章 遊撃手

### (一) 遊撃手の位置

普通の場合(一)は二壘と三壘との中間よりも少しく二壘に近く、ラインの後方二三間位の處であるが、無論他の壘手に就いて云つたと同じく、必要に應じて左右前後に多少の變化を試みなければならぬ。

### (二) 遊撃手に對する注意

殊にグラウンダーを捕ることに熟達して居る必要がある。無論左右に廣く守り得る技倆も必要である。けれども緩いグラウンダーに對して直ちに前方に走り出て捕り得る練習をも忽がせにしてはならないのである。

それから打者の打球に對しては、之を捕つて敵をフォース、アウトにし若くはダブルプレーを演ずること、敵のバントに備へること、二壘若くは三壘に走者の居る時、打者の打つた球を捕つて一壘に投げんとするとき、必要に應じて先づ一應其等の走者を牽制することを忘れてはならないこと、此等は前に他の壘手に就いて云つた處によつて容易く瞭解が出来るであらう。

### (三) 他の壘手との連絡

遊撃手の最も密接なる關係を有するは、二壘手との連絡及び共同動作である。先づ第一は右翼の方面に球を打たれた場合に、二壘手が之を捕りに出た時は、遊撃は之に代つて直ちに二壘を守らねばならぬ。また一壘から突入する走者を殺す爲めに捕手から球を送られた場合には、前に二壘手に就いて述べた如く、

時として自ら其球を捕つて其走者を殺すか、然もなければ直ちに二塁手の後ろに廻つて其後衛とならねばならぬ。又二塁に走者が居る場合に之を牽制する爲めに、二塁手と代るく壘に走つて往く必要のある事は、前に述べた如くである。而して其走者を殺すには二塁手の方が動作の上から云つて比較的便宜の位置に在るのであるが、併し時と場合によつては遊撃手も其の任に當らねばならぬ。而して此の場合走者の牽制にのみ意を奪はれ、自己の守備を空くして、敵の打者に空虛を襲はれないやうに注意すべきは、前に二塁手の時に陳べたと同様である。それから投手に向けて打たれた場合には、孰れでも早くモーションを起したものが壘に立ち、他の者が後衛となるのである。

次に三塁手との連絡を云へば、左翼の方面に球を打たれて、三塁手が之を捕

りに出たならば、直ちに代りとなつて壘を守らねばならぬ。三塁に球の投げらるゝ場合に、必要に應じて三塁手の後衛となることは無論云ふまでもないことである。

最後に外野手、ことに左翼手若くは中堅手との連絡であるが、之は左翼若くは中堅の左翼に近き方面に打たれた球を、若不幸にして外野手が後方に逸した場合には、其の球を取り次ぐ爲めに、後ろの方に走つて行つて、適當なる壘に投げてやらねばならぬ。たとへ外野手が球を捕り得たにしても、餘りに距離の遠い時には、時として之を取次ぐ必要があるのである。

## 第八章 外野手

## (一) 一般の注意

前にも一寸述べた通り、外野手とは左翼手、中堅手、右翼手の總稱で其の任務の主とするところは、各塁の後方フェアグラウンドの守備である。而して其の守るべき範圍が内野手のそれに比して廣汎であるだけに、一切の點に關して確乎たる自信と、敏捷なる動作とを以つて、事に當らねばならぬ。

今其の任務の主なるものを擧ぐれば、己れの得るべき範圍に來た球を確實に捕つて迅速且つ正確に各塁若くは本塁に送ることが其の一。内野手の後衛となつて之が援護の任に當ることが其の二。他の外野手の後衛となることが其の三である。

それから外野手の位置に就いて云へば、初心者の癖として頭の上を打ち抜か

るゝ事そのみ恐れて、兎もすれば餘りに深く備へる傾きがある。無論此は相手たるべきチームの打撃力如何によることで、優秀なる外國人チームを相手とする場合など、無論或る程度まで深く備へることが必要である。併しすべての場合を通じて適當と思ふ程度まで淺く備へて居る方が、孰れかと云へば得策である。然らすれば敵をして安打を打たしむべき箇所を少くし、内野手の頭上を越すやうな平凡なる球を逸する恐れが少いからである。而して頭上を越す大飛球に對しては敏捷にバックして之を捕ふるやう平素から練習を積んで置くべきである。

次に外野手たるに必要な資格の主なるものを擧ぐれば、守備の方面に於ては疾走力と視力とに於いて完全であることが必要である。此は外野手の守るべ



き範圍が廣いのと、打者の球を早く見分けること、大飛球を打たれた時など時として日光や風力の爲めに影響せらるゝことがあるから、之に應じ得る必要があるからである。此の外に必要な條件は、外野手は強打者でなければならんと云ふことである。此は外野手の任務は充分彼等をして打撃の方面に精力を集中するの餘裕を興へて餘りあるからである。近來プレーヤーの打撃力が重ぜらるゝやうになつてからは、少しく優れたるチームにあつては、日本の如きすらも打撃力の弱き者は、他に如何なる長所ありとも、外野手たる資格なしとさへ云はるゝに至つた。

更に投球及び捕球に就いて外野手の心得べき點を擧ぐれば、ライナーや、フライを捕るべきは無論であるが、グラウンダーを捕ることに熟練して居なければ

ならぬ。若し外野手にして一度び球を逸せんか、時とすると敵をして二壘、三壘、若くは本壘を陥れしむる恐れがあるから、如何なる場合にも球を後ろに逸しないやうに注意して居なければならぬ。それから投球に就いて云へば、一般に遠くへ投ぐべき場合が多いのであるが、其の時には成るべく一バウンドで達するやうにしなければならぬ。即ち外野手がホームへ投る時とか、右翼手が三壘へ投げる時とか、若くは左翼手が壘に投ぐべき必要のあつた時など、吳々も此の點に注意しなければならぬ。つまり斯くすれば比較的時間も早いし、正鵠を逸する恐も少く、且つ其球を捕つた者が敵に付けるにもつけ易いからである。

次に風日光等に對する場合の注意を云へば、球が風に追はるゝ時は少しく後

過ると思ふ處まで走り、反對の場合には少く前に出、横に吹く時は風の方向に従つて左右に寄るのである。それから日に向つて球を捕る時は、黒とか青とかの眼鏡を用ゐる外はない。而して仰向いて居るとき決して日を見ないやうに注意することは云ふまでもない。また頭の上を抜かれる大飛球に對しては前向き  
の儘後ろに退らずに、一定の場所に見當をつけて一生懸命走つて往き、其處で  
振向いて捕るべきである。

ライナーを打たれた場合には、餘り急いで前にモーションをつけてはならぬ。總じて外野に来るライナーは多少とも上に浮いて来る傾きがあるからである。それから兩翼に来た球は孰れもファウル線の方に曲る傾きがあるから其積  
んで居なければならぬ。

安全球を飛ばされた場合には、若し壘に走者が居れば、其の走者をして成るべく多くの壘を得しめないやうに注意せなければならぬ。打者に取つては安全球たり得るとも、場合によつては他の走者をフォースアウトにすることは決して少くないから、必要に應じて適宜の處置を取ることが忘れてはならぬ。即ち第一壘に走者ある場合に、中堅手の前に打たれたライナーの如き其適例である。若し走者がなかつたならば、其の打者の取り得た次の壘に球を返すことを忘れてはならぬ。

(二) 各外野手に對する注意

外野手の位置に就いては既に大體を述べて置いたが、個々の外野手に就いて今少し詳しく云へば、左翼手の陣すべき位置は、遊撃手と三壘手との中間の後

方約七八間位で、少しくファウルラインに近いところ、中堅手は本壘と二壘とを貫く線より心持左翼によつたと思ふ邊の後方、右翼手は一壘手と二壘手との後方であるが、此また打者の癖若くは打撃力の強弱によつて多少とも、其位置を前後左右に變ずることが必要である。

次に他のプレーヤーの後衛となると云ふ點に就いて云へば、左翼手は常に三壘手、遊撃手、及び二壘手の後衛となると共に、中堅手の後衛となることを忘れてはならぬ。中堅手は二壘手及び遊撃手の後衛となると共に、左翼手及び右翼手の後衛となり、右翼手は一壘手、二壘手及び中堅手の後衛とならねばならぬ。

其他の點に至つては前節總説の條下に述べた處を参照し、更に後節に述べる

守備上の注意を参照して頂き度い。

## 第九章 守備上の注意

### (一) 挟撃

若し走者を挟むことが出来たならば、必ず前の壘の方に追いつめて殺すやうにしなければならぬ。さもないと若し失策した時に次の壘を盗まれるからである。殊に注意すべきは機を失しない限りに於て成るべく追ひ詰めてから球を向ふ側に居る味方の手に渡すやうにしないと、走者との距離が餘りに遠いうちに球を投げると、機を見て反對に突入せらるゝからである。無論此の時には各プレーヤーが皆集まつて来るのは云ふまでもなく、其等が入代り入代りして走者

を追ひ詰めるのである。而して球を味方の手に送る時餘りに強からず、また餘りに弱からぬ速度の球を投げ、走者の身體に當てないやうに注意せねばならぬ。それから挟まれた走者の後に居る走者は、若し其の挟まれた走者が殺されたらば、次の壘を取らうと嗅つて居るから、愈々挟撃に成功すると同時に此の走者をも殺すことを怠つてはならぬ。

(二) バントに對する備方

敵が若しバントを打つべき場合には前にも云つた通り内野手は其の陣地を内野のうちに進める必要がある。併し三壘に走者の居る場合には三壘手は壘から餘り多く離れることを許されないから、多くの場合遊撃が捕るやうにしなければならぬ。又二壘の方へバントせられた時は一壘手が之を捕り、二壘手が一壘

を守り、遊撃手が二壘を守るのである。無論此の場合に陣地を変更するのは、内野手のみで外野手は普通の如く陣して居るのである。

(三) 球をつける時の注意

敵の走者に球をつける時は、成るべく下の方につけるやうにしなければならぬ。従つて投げる方でも比較的下の方へ向けて投げる必要がある。何故なれば上の方へつけると、滑り込などせられた時は、走者の身體に觸れないことがあるからである。それから呉々も注意すべきことは出來得る限り兩手で堅く球を握み且つ抑えたまゝにつけるやうにせねばならぬ。走者に衝突せられて落される恐れがあるからである。但し止を得ざる場合は此限りに非ずである。

(四) 失策に就いて

先づ自分が失策をした場合に就いて云へば、決して失望しないで出来る丈け敏速に其の善後策を講じなければならぬ。ことに内野グラウンダーをハンプルした場合若くは難球を捕へ得た場合など、決して周章へてはならぬ。と云つて餘りぐずぐずして居ては殺すことの出来るものをも、むざぐず生すやうなことがあるから、其邊は確實を失はない程度に於て、出来る丈け早く適當の壘に投げねばならぬ。併し若し既に其機を逸して了つて、とても間に合ぬと見たならば、寧ろ自重して投げない方が得策である。無理をすると云ふことは不測の失策を招く源である。と云つて之を口實に動作の遲滯を來すやうなことがあるてはならぬから、練習の時など必ず間に合ふと否とを問はず屢々試みる必要があるのである。それから他人の失策に對しては成るべく同情的態度に出て、決して之を咎めるやうなことをしてはならぬ。寧ろ之を鼓舞激勵して、しよげたりあがつたりすることから救つてやらねばならぬ。

(五) 投手に對する援助

此は前にも述べて置いたが、投手はチームの首腦とも云ふべきものであり、且つ常に活動して止まないものであるから、他のプレイヤーは絶えず之を勵ますやうに力めねばならぬ。ことに敵から打たれたり又は四球を續發したりする時など、一層意を用ゐて之に元氣をつけてやらねばならぬ。

(六) 常に心得居るべきこと

打者となる者がアウトの者を知つて居る必要があると同じく、守備にある者も常にアウトの數を心に留めて、次に打者から打たれた場合には如何なる處置

を取るべきかを、絶えず注意して居なければならぬ。

(七) 平凡なる球に對する注意

難球に對して失策するのは、蓋し當然とも云ふべきであるが、寧ろ平凡とも云ふべき球に對して失策することは、之を實際の場合に見て、決して少くないのである。之は多少安心と云ふことも其原因をなして居るのであらうが、平素其種の練習を怠つて居ると云ふことも、慥かに其の一部をなして居る。兎に角平凡な飛球や、緩いグラウンダーなど、充分に注意して捕ることが必要である。

(八) 誰にでも捕らるゝ球

誰にでも捕らるゝやうな球に對しては、キャプテンの命令に従つて取るべき

であるが、原則としては動作の最も自然的なる地位にある者が捕るべきである。たとへば一壘手、二壘手、右翼手の三人に捕り得らるゝ球の來た時は、右翼手に捕らせるのが普通である。何となれば前方へのモーションは比較的容易であり、球を捕つた後で投る場合にも逆モーションになることが少いからである。併し若し自分が慥かに捕れると云ふ自信があるならば「よし」と叫ぶか、若くは其他の方法によつて、其の事を他のプレーヤーに知らせねばならぬ。

(九) チームワーク

チームワークとは二人以上共同して敵を苦しむることを云ふので、之には守備の場合と攻撃の場合と二つあるが、茲には便宜の爲め兩者ともに擧げるとしする。

## (イ) 走者が四球て出た時

此の場合に投手から来た球をプロテクターの下などに隠して居て、走者が二壘を窺ふ爲に一壘を離るゝや否や球を送つて之を殺さんとするものである。此の場合には捕手と一壘手との間に充分なる連絡のとれて居ることが必要である。

## (ロ) 走者が第一壘に在る時

此は一壘手が壘を離れる程度によつて走者も亦二壘に向つて前進するものであるから、充分走者を釣出して置いて、捕手の合圖によつて投手は球を待つたまゝ全速力を出して一壘に走り、走者を殺すのである。

## (ハ) 走者が第一壘と第三壘に在る時

此の場合一壘にある走者が二壘を奪うとする時、捕手は直ちに球を二壘に向

けて送るのである。然うして若し三壘の走者が本壘に突入せんとしたならば、遊撃手が其の球を中途で捕つて直ちに捕手に返して敵を殺すのである。若し三壘の走者が躊躇して歸らなかつたならば、遊撃手は中途で球を捕らないうで二壘手に捕らせて、一壘から来る走者を殺すのである。此場合には捕手並びに遊撃手の投球が猛烈にして且つ正確であることを必要とする。さもなければ此のトリックを敵から逆に用ゐられて、却つて隙に乗じられることが少くない。

## (ニ) 走者が第二壘及び第三壘に在る場合

これは前に述べた二つを一緒に合せたやうな風のもので、此の場合には守備側の者の最も注意する處は無論第三壘の走者にあるのであるから、勢ひ二壘の走者を牽制することが足りないので、其の走者は必ず壘を離るゝことが多い。

て、此の場合にも(ロ)の場合の如く投手が機を見て球を持つたまゝ、第二壘に突進し其走者を殺さんとすれば、勢ひ第三壘の走者は本壘の方にモーションをつけるに相違ないから、機を窺つて三壘に球を送つて其走者を殺し若くは三壘と本壘との間に挟まんとするのである。若し此の場合二壘の走者を三壘との間に挟み得たならば更に妙である。其の時は成るべく三壘に推し詰め三壘の走者をして壘を離るゝことを豫備なくせしめ、機を見て之が攻撃に轉するのである。此の場合にも機を見ることが敏てなく投球が正確でないと、却つて敵から逆に乘じらるゝ恐れがある。

(ホ) ヒット、エンド、ラン

此は壘にある走者と、ことに三壘に在る走者と計つて、投手がモーションを

つけると同時に走者は突進を始め、打手は如何なる球なりとも必ず打つて之を送り、若くは生還せしむるのである。之は一點二點を争ふ際とい時に用ふべきもので、如何なる球でも打たなければならぬ必要があるから、餘り力を入れて打つては、飛球となつたり、ファウルとなつたり、乃至は當らなかつたりする恐れがあるから、此の場合はバントを應用するのが最も安全である。勿論此の場合には合圖を定めて置くとか、乃至はコーチャーによつて双方の意思を通ずるとかする必要がある。

## 第十章 練習法

### (一) 投方と捕方



攻撃に關する練習法は既に前篇に於て陳べたから、茲には主として守備に關する方面のこのみを記すこととする。先づ第一に球の投方に就いて云へば、最初オツアスローで投げることを練習するので、其の投方は投手のオツアスローの投方で投げれば可いのである。それに熟達するとサイドスローやアンダーローに進むのである。それから捕方に就いて云へば、初めのうちは必ず両手で捕らねばならぬ。無論グラブの利用は片手で捕ふことに在るのであるが、併し初めのうちは両手を用ゐて捕らないと、身體の動作が遅滞になる恐がある。其次には片手で捕ること。而して球を捕ら時は成るべく自然なスタイルで成るべく自然に捕らねばならぬ。即ち右へ來た球は身體を右に開いて取り、カーブする球は其の方向に少しく手を引くと云ふ風に成るべく球に従つて捕るのである。

る。それから餘り遅く手を出さない様にしなければならぬ餘り遅く手を出すと球を捕ると云ふよりも球を防ぐと云つた風になるから、手も痛く取り外すことも多いのである。次に高い球を捕る時は成る可く指を後ろへ反さないやうにし、寧ろ指先を前に出すやうな加減にして捕らねばならぬ。これは球の後ろへ逸けるのを防ぐ爲めである。低い球にも矢張り之と異曲同巧の注意が必要である。グラウンダーは普通腰を屈めたまゝ捕るので、それは投げるモーションが直ぐつけられるからである。併しグラウンドの悪いところでは身體で止める覺悟が必要である。要するに捕球上の微妙なる呼吸は練習と經驗とを重ねて自然に吞込む外ないのである。

(二) チームとしての練習

練習の順序は投手が集まると、暫の間球を投げ合つて肩ならしをやり、次にバッティングの練習、其間投手と捕手とは別の處でピッチングの練習をし、次は夫々位置に就いて、打撃の練習をすると共に守備の練習をもし、出来るならば走塁をも練習し、次にノックを打つて貰つてフキールディングの練習をするのである。其の時注意すべきはノッカーとなる者も實戦的の氣持で打ち初めは平凡な球から漸次に難球を打ち若くは安全球を打つ等の事をし、守備に立つ者は云ふまでもなく、一生懸命になつて練習すべきである。要するに練習の際に忘るべからざるは、實戦に臨んだ時と同じ心持になつてやると云ふことである。

(三) 試合開始前の練習

此は大體前に述べたところと同じく、只打撃と守備とを、敵味方で交互に練

習し、普通の場合に於てはシートに就いての打撃の練習はしないのである。それから此の場合に注意すべきことは、打撃の練習は兎に角として、守備の練習に餘り多く時間を費し、若くは全力を用ひ盡して、肝腎のマッチに當つて振ふべき餘力を残さないやうなことのないやうにすることである。

第十一章 審判に就いて

たとへ審判者に於いて不公平なる處置をとる考へはなくとも、其の不明よりして屢々試合の結果に重大なる影響を與ふることがあるから、出来るだけ平素から審判に関する研究を積む必要がある。

而して第一に審判者の心すべき條件は、公平であること、規則に精通して居

ること、巧みに球を見分けることである。序てに審判者の最も見誤り易い球を擧げて見ようならば、ボックスに近く立つて居る打者へインコーナーの球が投げられた場合で、此の場合打者が身體を後ろへ引くの釣られて、近過るやうに誤認することがある。それから同じくドロップカーツ、若くは其他のカーツでも其の曲る處と大きさによつて、ストライともなればボールともなるのであるから、此も平素からよく注意して研究せねばならぬ。それから球の高さについて云へば、打者は打つ時に兩脚を擴げて打つのであるから、勢ひ身長が低くなるのであるから、其に眼を奪はれないやう、ボックスへ入つて直立した時の姿勢によつて其の高さを判定すべきである。普通複審判が原則であるが、時とすると二人で總てをやることがあるから、其場合には走者の居る時は投手

の後ろに立ち、さもない時は捕手の後に在つて審判すべきである。審判者の聲は堂々として場に徹する如く、判断は成る可く迅速にし、塁に走つて死活を見、死活を宣告する場合に手もて合圖することが必要である。普通セーフの時は抑へつけるやうにし、アウトの時は兩手を上げることになつて居る。

野

球

終

前早稻田大學選手編

第五版

# ベースボール

三五版  
寫眞版  
定價金 參拾錢  
郵税金 四錢

本書の眞價は世既に定評あり今茲に發せし四版以來絶版の姿となりて永年諸君の渴望に背きしも近く第五版を發行して諸君の座右に見へんとす幸に愛讀の榮を給はんことを

發行所

東京早稻田  
馬場下町

寶永館

## 附 録 第 一

### 記 録 法

「スコア」は人により其記し方が違ふが其目的は「チーム」の経過を一目瞭然にしたならばよいのである。此心で記るせば如何なる方法でもよいのである。

I=P. 2=C. 3=IB. 4=2B. 5=3B. 6=SS. 7=LF. 8=CF. 9=RF.

K ストラクアウト。

K' ナットアウト。

F フライ。F8 とすれば OF フライ。

F' フライを著す。F'8 とすれば OF がフライを著す。